

SDGs Study tour Report



Action for
Climate
Empowerment
on Kangaroo Island

オーストラリア・カンガルー島で学ぶ
気候変動へのアクション

2018年8月29日～9月7日

2018 年度 SDGs スタディーツアー報告書

「オーストラリア・カンガルー島で学ぶ

地球規模課題へのアクション」

2018.8.29～9.7

聖心女子大学 文学部教育学科

「発展途上国における教育問題 I」

はじめに

2018年の夏はそれまでにないほどの酷暑でした。2016年は過去130年間で最も平均気温が高い年であったのに、それをさらに更新するのではないかと思われるほどに、連日猛暑が続きました。

地球は温暖化していると言われており、このまま気温が上がり続けると、食料不足になったり、動植物が絶滅したり、気候変動による難民が増えたり、台風が大型になったり、ひいては大惨事になることすら懸念されています。

気候変動は、戦争のように突如として惨事が目の前に起こる問題とは性質を異にします。その特殊性は、コップの水がひしひしと満たされるかのように徐々に事態が進行し或る日突然に水が溢れてしまうというように、不可逆的なカタストロフィーであることに見出されるのです。

こうした事態に対して、国連はつとに対策を打ってきました。気候変動に対するアクションを含めた持続可能な開発目標(SDGs)を採択し、さらなる事態の悪化を防ぐための「パリ協定」が結ばれた2015年はその画期的な年であったと言えます。

近年、国連はACE(Action for Climate Empowerment)というキャッチワードを用いて、気候変動へのアクションを呼びかけていますが、地球規模の課題にどうアクションを起こしてよいのやら、私たちはピンとこないのが正直なところではないでしょうか。学生に同様の呼びかけをしてみても、何かしなくてはと思いつつも何をどこから始めてよいのか分からない、というのです。

そこで気候変動をテーマにスタディツアーを組むことにしました。訪問先は、市政から市民の実践に至るまでリアルな問題と問題解決へのアクションが見出せるカンガルー島です。

カンガルー島は豪州の南に位置する島ですが、東京都の2倍に相当する面積を持つ島です。手付かずの大自然も残る一方で開発が徐々に進み、最近は大陸からの橋を架けるか架けないかで論争があった地域でもあります。

そんなリアルな現場から学生たちは20箇所以上の「現場」を訪れ、多様な実践知を一般家庭や小規模ビジネスを営む市民、街の店舗、市役所や市長ご本人から直接学びました。

この報告書から学生たちが現地で何を感じ、どんな葛藤を経て価値変容に至ったのかを感じ取っていただければ幸いです。

このツアーを構想段階からご尽力いただいたボブ&ジェニー・ティーズデイルご夫妻はじめ、国内の事前調査でご助言・指導をいただいた認定NPO法人環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲成さん、横浜市資源リサイクル事業協同組合企画室室長の戸川孝則さん、現地で豪州の教育のご専門家として学生たちに大切な学びを支えてくださった滋賀県立大学の木村裕先生、そして帰国後の事後学習でお世話になったThink the Earth理事の上田壮一

さん、本当にお世話になりました。この場を借りて心よりお礼を申し上げます。

最後になりますが、海外のスタディツアーへのご理解をいただいている保護者の皆様やご協力を頂戴している聖心女子大学の教職員の皆様にも改めまして謝意をお伝えいたします。

カンガルー島で「答えのない問い」と出会った学生たちとの学びの旅はまだ続きますが、どうか今後ともお導きください。

2018年度「カンガルー島で気候変動を学ぶSDGsスタディツアー」世話人
教育学科 教授
永田佳之

目次

はじめに.....	i
目次.....	iii
1. メンバー紹介.....	1
2. 日程.....	4
3. カンガルー島の基本情報.....	7
4. 訪問場所の紹介.....	9
5. エコハウスの紹介.....	15
6. 事前学習.....	17
7. 聖心祭での取り組み.....	19
8. 研究ページ.....	20
9. 感想.....	42
10. 帰国後アンケート.....	59
11. 名言集.....	67
12. フォトギャラリー.....	70
むすびにかえて.....	iv

1.メンバー紹介

岡田 英里

聖心女子大学 文学部国際交流学科3年

我らがチームリーダー！！いつもはしっかりしてるのに、実はすーぐソファで寝落ちしちゃう可愛い一面も。ちなみに好きな俳優は田中圭。そんなえりさんはあらゆるデータやお菓子、餃子でさえ【シェア】したがるので、格好良い田中圭の画像を見つけたら「シェアしますね！」と声をかけてみよう！！

紫葉 彩央里

聖心女子大学 文学部教育学科教育学専攻3年

ちっちゃめサイズの体から発する笑い声で、全米を泣き笑いさせたと噂のマスコットキャラクター！！ツアー中はお母さんのような心の広さでおてんば2年生4人の面倒をみてくれました！広尾の某スーパーでアルバイトをしており、芸能人にお釣りを渡す時には左手を丁寧に添えるそうです。

武内 友里恵

上智大学 総合グローバル学部3年（授業交換制度）

胃袋ブラックホール山岳部！！みんなが食べ切れないモノや、食後のケーキを吸い込んでいく姿にびっくり！でも自炊ができるしっかり者。そんな顔とは裏腹に真顔でギャグをとばすことも多々あるので、ゆりえさんとお話しするときは次の日腹筋が筋肉痛になることを覚悟しよう！

安藤 穂乃佳

聖心女子大学 文学部教育学科教育学専攻2年

ふわふわ～な雰囲気ですチームのオアシス的存在！！たまに飛んでくるスーパーウルトラ毒舌発言を気にしなければ、あなたは一生オアシスの住人です。でも実はとってもしっかり屋さん！ツアー中は数少ないPCを得意とするメンバーとして、みんなの頼れるアドバイザーとなっていました！

加藤 春菜

聖心女子大学 文学部教育学科教育学専攻2年

素敵ハワイアンガールといえばハル！！往復の飛行機合わせて4回同じ映画を観てたけど、全部開始15分で寝てたんだよ～1回も完結できなかったんだって！あるよね～～！！そんなハルもやる時はやるんです。仕事がめちゃくちゃにはやい！ただ夜食のチョコレートも光の速さで食べる！あなたの肌の綺麗さはどこから？？

小島 友梨香

聖心女子大学 文学部教育学科教育学専攻2年

今回のスタディーツアーで華々しく海外デビューを飾ったコジマさん！、、、オジマだよ！！で一世を風靡したお菓子大好きゆりかちゃんは、みんなに夜食を分け与えてくれる優しさの持ち主。動物に対する愛情もとっても深く、ツアー中は生物多様性に関する研究を誰よりも頑張っていました！

齋藤 雅代

聖心女子大学 文学部教育学科教育学専攻2年

掃除、配膳家事全般はお任せあれ！！ツアー中の朝ご飯では大活躍。そんな雅代はきっといいお母さんになるでしょう。興味があるものにはとことん追求する、とても意思の固いまっすぐな直球少女。フットサルサークルでも女子幹事長として頑張っています！あれ少し褒めすぎたかな？

木村 裕先生

滋賀県立大学 人間文化学部人間関係学科准教授

アデレード空港で初対面してから、怒涛の一週間を共にしたチームメイト！！オーストラリアに詳しいゆたか先生からは、たくさんのことを学ばせていただきました。お子さんが産まれてすぐの出発だったので、忘れられないか心配するゆたか先生は、きっとお子さんと同じくらい可愛らしかったはず！？1番怖いものは【東京の女子大生】らしい。あれ？

永田 佳之先生

聖心女子大学 文学部教育学科教授

ツアー中は通訳兼、運転手兼、コックとして大活躍！！英語は言わずもがな。常に野生のカンガルーを気遣う安全運転！栄養のバランスを考えた夜ご飯は絶品。ヨシ半端ないって！！そんな出来ひんやん普通！余談ですがそんなヨシは犬が大好きです。現地でも犬に懐かれるのがダントツ No.1 でした。完璧。



2.日程

<u>日にち</u>	<u>時間帯</u>	<u>内容</u>
8月29日 (Wed)	午後	集合 成田国際空港発
8月30日 (Thu)	午前	メルボルン空港着 メルボルン空港発
	午後	アデレード空港着 アデレード市内・大学の散策 アデレード空港発 キングスコート空港着 Villas on the Bay に到着 (宿泊施設)
8月31日 (Fri)	午前	The Kangaroo Islanders(新聞社)を訪問 →取材を受ける KI Lions OP Shop (リサイクルショップ)を訪問 Chocol' Art & Coffee (コーヒーショップ)を訪問
	午後	Fine Art Gallery(アートギャラリー)を訪問 The Ligrian Honey Farm(養蜂場)を訪問 Frogs and Roses にて昼食 Bellevista(菜種油ファーム)を訪問
9月1日 (Sat)	午前	キングスコート空港を見学
	午後	ティーズデイルご夫妻のエコハウスを訪問 →サステイナブルな理論と実践に関する講義 →カンガルーミートのバーベキュー

		→1人リフレクションタイム →俳句作り
9月2日 (Sun)	午前	キャンプ場を見学 →エコツーリズムの実践について学ぶ Pennington Bay(ビーチ) Ocean Safari(イルカウォッチング) →野生のイルカを船の上から見学 Oyster shopにて昼食
	午後	American River (造船所) →コミュニティによる船造り Petite Provence →家庭におけるローカルビジネスを通じたサステナビリティの実践を見学 Kingscote Ambulance Station(救急ステーション)
9月3日 (Mon)	午前	Seal Bay(アシカウォッチング)
	午後	Raptor Domain(猛禽類の動物園) Flinders Chase National Park(国立公園) →Remarkable Rocks(奇岩)を見学 Admiral Arch(アシカ生息地) Kangaroo Island Wildlife Park & Aquarium (動物園)
9月4日 (Tue)	午前	Natural Resource Management(州立自然保全センター)
	午後	The Mayor of KL Lecture(市役所)

		<p>→市長と面会</p> <p>→サステイナブルな実践に関する講義</p> <p>Kangaroo Island Community Education(地元の初等・中等学校)</p> <p>→昼食</p> <p>→サステイナブルな実践を見学</p> <p>プレゼンテーションの準備</p>
9月5日(Wed)	午前	<p>キングスコート(町)を散策</p> <p>ベヴ・マクスウェル&コリン・ウィルソンご夫妻の家を訪問</p> <p>→民間家庭内の気候変動対策を見学</p>
	午後	<p>プレゼンテーションの準備</p> <p>プレゼンテーション発表</p> <p>→お世話になった島内エキスパートを招待</p> <p>ディナー</p> <p>→日本食でおもてなし</p>
9月6日(Thu)	午前	キングスコート空港発
	午後	<p>アデレード空港着</p> <p>アデレード観光</p> <p>アデレード空港発</p> <p>シドニー国際空港着</p> <p>シドニー国際空港発</p>
9月7日(Fri)	午前	<p>東京国際空港着</p> <p>解散</p>

3.カンガルー島基本情報

1.概要

(1)面積：4,352 km²

オーストラリア国内ではタスマニア、メルビル島に次いで3番目に大きな島である。

総面積の約1/3が特別保護区に指定されている。総面積は東京都の約2倍である。

(2)位置：南オーストラリア州に属し、同州のアデレードから南西に位置するセント・ヴィンセント湾に浮かぶ島である。

(3)人口：約4,000人

(4)気候・自然

カンガルー島が属する南オーストラリア州の気候は温帯性気候で温帯性気候は日本のように四季がはっきりしているのが特徴である。ただしカンガルー島は昼夜の温度差が激しいこともある。それぞれ、

春（9月1日から11月30日まで）

平均最高気温 19°C、平均最低気温 9°C

夏（12月1日から2月28日まで）

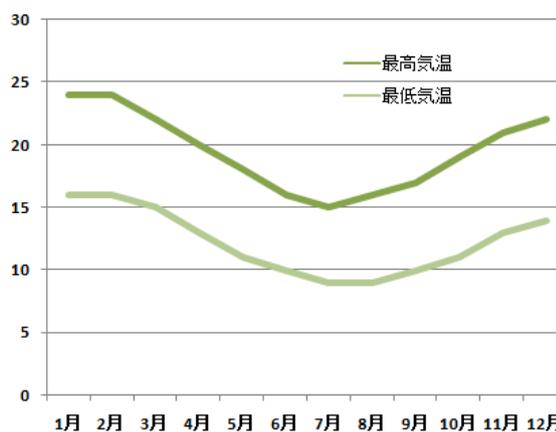
平均最高気温 24°C、平均最低気温 14°C

秋（3月1日から5月31日まで）

平均最高気温 22°C、平均最低気温 11°C

冬（6月1日から8月31日まで）

平均最高気温 16°C、平均最低気温 9°Cの4つの季節に分かれている。



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高気温	24	24	22	20	18	16	15	16	17	19	21	22
最低気温	16	16	15	13	11	10	9	9	10	11	13	14

表 1 カンガルー島月別平均気温

https://www.jams.tv/wpcontent/themes/jams.tv/old_html/client/kangarooisland/feature/22908/2

また本土から離れていたため、開発や外来種による影響を受けなかったため、オーストラリア独自の貴重な動植物の宝庫となっている。島内には様々な動植物が生息していて、島内には1つの国立公園と23の自然保護区がある。

2.歴史

1802年にカンガルー島はオーストラリア大陸の海図を作成したイギリスの探検家でもあり航海者でもあるマシュー・フリンダースがカンガルー島を発見した。

その後ヨーロッパからの流刑地だったオーストラリア本土などの監獄から脱走した囚人、捕鯨船から逃げ出した乗組員などが、カンガルー島に流れつきアシカ漁などで生計をたて、ここで暮らし始めた。1836年になると、イギリスがオーストラリアを流刑地から植民地として開拓する方針に変更したため、カンガルー島は自由移民による最初の植民地になった。

当時のオーストラリアではアシカの毛皮や脂など貴重な輸出品であり、カンガルー島でも、大勢の漁師がオーストラリア・アシカを捕獲した。そのため、アシカの数激減した。船の座礁の可能性などのため人間が近づくことが難しかったシールズ・ベイのアシカは難を逃れた。現在はアシカの生息地になっており、大切に保護され、また観光客がアシカを見る際もガイドの同行が義務付けられている。

4.訪問先の紹介

KI Lions OP Shop

⇒古着や古本を寄付してもらい、ドクターヘリやはしかの免疫の薬を寄付する等のコミュニティのために利用されている。



Chocol' Art & Coffee



⇒メルボルンで受賞したこともある唯一のロースト豆使用コーヒー店。島民のコミュニティの場でもあり、コーヒーかすは肥料として庭に撒いている。ここでは、Myマグカップやタンブラーを持っていくと50セント割引という制度がある。

Fine Art Gallery

⇒この経営者の銀細工芸術家のフレッドさんは、11年間アートを通して自然の大切さを伝える活動をしている。'Truth Teller' 真実を伝えるのがアーティストだという信念を持って芸術活動を続けている。



The Ligrian Honey Farm

⇒カンガルー島にある養蜂場であり、ミツバチは、イタリアから持ち込まれた純血のミツバチである。はちみつは約3週間の間隔で集めている。



Bellevista



⇒3千エーカーの土地で、羊の飼育や菜種の栽培を行なっている。栽培されている菜種の多くは日本へ輸出され、菜種油として販売されている。

キングスコート空港

⇒1983年に開港されたこの空港では、再生可能エネルギーや電気自動車など環境に対して様々な取り組みが行われている。島の芸術家の作品が飾られているアートギャラリーがある。また、地域のコミュニティの場にもなっており、空港としては、豪州初のコンサートホールとして使われている。



エコハウス

⇒今回の旅の案内であるティーズデイルご夫妻の住まいで、House design, Waste, Energy, Water, Gardens など様々な角度から環境を考えた家庭でできる取り組みを行っている。



Ocean Safari



⇒ボートに乗り、イルカやアザラシの近くに行くことができた。イルカの親子や群れを肉眼で見ることができる。

Petite Provence

⇒カンガルー島に小さなフランスを作りたいという思いから、ブリジット&キム・ブルースご夫妻が始めたローカルビジネス Petite Provence。砂を土に変えることから始まったこのビジネスは、自然の恵みからえられたものに感謝しながら行っており、残った食材などもコンポストをして無駄なく使い、1つの大きな好循環を見ることが出来る場所だった。



Kingscote Ambulance Station

⇒ルーウェンバーグご夫妻が勤めるこの救急ステーションは、カンガルー島に唯一ある救急医療や診察所としても対応できる病院である。人を助けるだけでなく、いかにレジリエンス（しなやかな強さ）が備わった島にしていくかということも考えながら働いている。



Seal Bay



⇒ここはカンガルー島の観光地で野生のアシカを見ることができる。アザラシがストレスなく過ごせるように、観光客を管理する体制をとっている。人間と動物の共生を目指している。

Kangaroo Island Wildlife Park & Aquarium

⇒カンガルー島にある動物園。固有種や外来種等の様々な動物がおり、至近距離で観察をすることができる。また、カンガルーやワラビー、コアラへの餌やり体験や直接触れ合うことができる。



Natural Resource Center

⇒公有地の責任、持続可能な生産活動の促進、エコツーリズムの促進、島の環境保護含む様々なプログラムやプロジェクトに取り組んでいる組織である。

(e.g. 植生管理)



Lecture by The Mayor of Kangaroo Island



⇒カンガルー島の市長を8年間続けているピーター・クレメンツ氏は、島民を大切にしつつ環境に配慮したエコツーリズムを通してカンガルー島を世界的に知られる持続可能な島にすることを目指している。彼は特にカーボンニュートラル政策に力を入れている。

KICE (Kangaroo Island Community Education)

⇒カンガルー島にある唯一の学校であり、島内に3つのキャンパスを持っている。4歳児くらいから高校卒業までの幅広い年代の子どもが一つのキャンパスで学んでいる。



Colin Wilson and Bev Maxwell ご夫妻の家



⇒カンガルー島の一般家庭での取り組みを紹介してくれたご夫妻。コンポストや家庭菜園、自然の恵から得た水やエネルギーがベースとなった生活を見学させていただいたことで、身も心も温まる時間となった。
*家庭でのサステイナブルな取り組みをまとめたプリントもある。

5.エコハウスの紹介

ここでは、今回のスタディツアーをコーディネートして下さったティーズデイルご夫妻を紹介する。



ボブ・ティーズデイル	ジェニー・ティーズデイル
オーストラリア国立フリンダース大学国際教育研究所（FUIIE）元所長である。その後、アジア太平洋諸国において教育開発、アボリジニの人々の教育、ESDの実践に尽力している。	平和と国際理解への教育を専門に教師教育やESDに関わり、エコハウスなどカンガルー島内外でESDの実践に貢献している。

私達は、ご夫婦のエコハウスを見学した。最初お家を訪問した時におもてなしとして、手作りレモネードと一緒にマフィンをごちそうして下さった。世界一美味しいマフィンであった。



手作りレモネード
と雨水を使用した
お水

彼らはほぼ自給自足で暮らしている。電力、食、水に関してほぼ100%自分達で賄っている。エコハウスの取り組みをWaste, House design, Energy, Water, Gardensの5つに分けて説明する。

1.Waste (ごみ)

生ごみは、鶏の餌になりフンが肥料になり、紙ごみなどは、コンポストを設置している。リサイクルバスケットがあり、ペットボトルは1本10セントでキングスコートへ回収されており(2週間に1回)、下水は、分解するタンクを通過して森へ流れ、肥料になる。

2.House design

冬は暖かく、夏は涼しいように北向きに窓が作られている。風通しをよくするため窓がすべての部屋につくられている。部屋に鉄製の暖炉があり、部屋全体を温めている。1年を通して18°Cに部屋の温度が保たれていて、天井には、空気の流れを良くするためファンがついている。家が半分地面に埋まっており、地熱を利用している。



3.Energy

ソーラーパネルで発電。再生可能エネルギーで電気が十分なため、この1年間は蓄電するバッテリーを使っていない。

4.Water

雨水を貯めるタンクが巨大なタンクが2つあり、10万リットル溜まるようになっている。キングスコートから水道管は通っていない。



5.Gardens

野菜、鶏、果物などを畑で育てている。また、約1万本の木を手で植樹している。2009年のスタディツアーでは聖心生がAsu no Moriと名付けて植樹を行い、森の一部として育まれている。

この5つの観点からの取り組みは全てつながっていて持続可能な社会にするために必要不可欠なものであることが分かった。また、彼らは自宅の取り組みだけでなく、地域の小学生にエコハウスの取り組みを紹介する活動を行っている。こうした活動がカンガルー島のコミュニティを強くし、子どもから大人までサステナビリティについて考えることができる社会を構築しているのではないかと考えられた。また、広大な土地には、野生のカンガルーがたくさんいた。テーズデイルご夫妻は、カンガルーと人間は尊重し合い、共存していくことが大切であると言っていた。このエコハウスは、幸福感と温かさで満ち溢れていた。広大な土地には緑豊かな自然、海、鳥やカンガルーなど動物が共存し、ボブとジェニーは、人や動物や環境に対して「愛」を持っていた。人や動物を思いやる「愛」と社会のため環境のことを考える「愛」が彼らにはあった。動物や人、自然など全てに対し、「愛」を軸として接しているからこそ持続可能な社会の構築につながるのではないだろうか。

6.事前学習の紹介

(1)8月15日：埼玉県環境科学国際センター

埼玉県加須市にある埼玉県環境科学国際センターは、国内外で起きている環境問題や気候変動について、様々な体験を通して楽しく学ぶことができる科学館である。スーパーマーケットやドライブなどの日常生活で起こる出来事の体験を通して、フード



マイレージや日々の生活の中での水の消費量や二酸化炭素の排出量について考えることができ、私達の生活と気候変動や環境問題が密接に繋がっているということを感じることができた。また同センターには研究所も併設されているため、展示室の2階にある資料館で、中国や韓国などと協力した国際的な研究についても知ることができた。

(2)8月20日：環境エネルギー政策研究所(IEEP) 飯田哲也さん

新宿区四谷にある環境エネルギー政策研究所は、自然エネルギーを利用した持続可能な社会の実現に向けてエネルギー政策の研究や提言、自然エネルギーの普及活動を行っている研究所である。この日は日本のエネルギーの変遷について学び、2011年3月に起きた東日本大震災以降、原子力発電よりも自然エネルギーを利用した電力生産



にシフトしていこうという動きが日本各地にあることを学んだ。またその流れの中で、「ご当地エネルギー」という地域で自然を利用した再生可能エネルギーを生み出し、地域の住民に安価で安全な電力を提供するという動きがあるということも学んだ。

(3)8月24日：横浜市資源リサイクル事業協同組合 企画室室長 戸川孝則さん

横浜市資源リサイクル事業協同組合では、企画室室長の戸川孝則さんから横浜市の事例をご紹介いただきながら、日本が行っているリサイクルについて学んだ。勉強会は3Rなどのリサイクルの基本的なお話、工場見学、世界と日本のリサイクルの関係についての3部構成になっており、勉強会全体を通して日本のリサイクル技術の高さを感じることができた。特に、工場で働かれている方が自らの手で資源に紛れているプラスチックなどの小さな資源以外のごみを分別している様子を見て、このような徹底された分別が行われているからこそリサイクルの好循環が生み出されて、一度使用されなくなったものでも再び異なる形になって再利用することができるのだと感じた。資源一つ一つにも価値があることを実感した1日だった。



(4)8月27日：JICA 地球ひろば

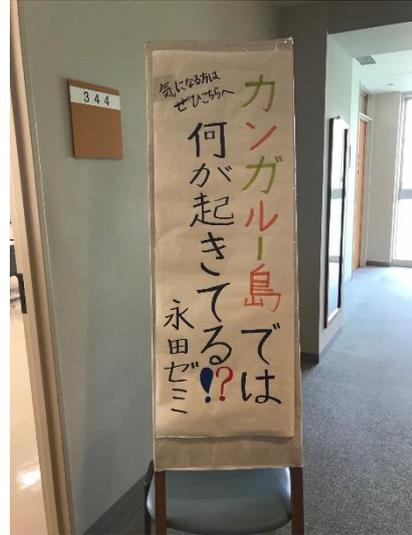
市ヶ谷にあるJICA地球ひろばでは、SDGsと絡めた様々な国際問題と、世界の食の問題について学んだ。映像やクイズや実物を触ることを通して、世界を取り巻く様々な問題について理解を深めることができた。特にパーム油の問題についての展示では、私達が普段食べている食品のほとんどにパーム油が使われていることが分か



り、パーム油が引き起こしている環境破壊は決して遠い国の話ではないということを実感した。またフードマイレージのブースでは、いかに日本は海外に多くの食べ物を頼っているかということ知り、4割以下という日本の食料自給率の低さにも繋げて考えることができた。

7. 聖心祭での取り組み

スタディーツアー終了後、私達がカンガルー島で学んだことを多くの方にお伝えしたいということになり、10月20日(土)・21日(日)に行われた聖心祭で展示発表を行った。発表の内容としては、政府・教育・ローカルビジネス・エコツーリズム・家庭の5つのレベルに分けて、そこで行われているサステナブルな取り組みを、多くの写真や現地で頂いた資料や動画などを用いて、難しいことでも楽しく学べる展示にするよう工夫した。しかし、もっとお客様の心に残るようなクリエイティブな展示はできないかということになり、事後学習として、一般社団法人 Think the Earth 理事の上田壮一さんのもとを訪問し、工夫した展示の仕方についてのご教授いただくことにした。



勉強会では、展示を工夫する方法だけでなく、お客様との対話を通して自分が現地で感じたことを言葉で伝えることが大切だと学んだ。また、1日目終了後にその日1日を振り返って展示のレイアウトを改善すると、2日目はより良くなって相手に伝わりやすくなるということも教えていただいた。



そのようなことを踏まえて臨んだ聖心祭は、私達が想像した以上に多くのお客様にお越しいただくことができ、常に私達とお客様との対話が飛び交っている活気あふれるものとなった。また、対話を通してお客様にカンガルー島の魅力を熱意を持ってお伝えすることができただけでなく、私達自身も対話から多くのことを学ぶことができ、とても充実した実りある時間となった。そして1日目終了後に、その日のお客様の動きや反応などを振り返ってレイアウトの改善を行ったところ、2日目は、お客様に少ない動きの中で多くの展示をじっくり見ていただけたような印象を受け、展示は伝えたいという思いだけでなく、相手の立場に常に寄り添って日々作っていくことが大切であると感じた。

8.研究ページ

オーストラリア・カンガルー島スタディーツアー後に、
参加者がカンガルー島・日本・カンガルー島のモデルであるサムソ島(デンマーク)の「気候変動/環境への取り組み」を考察した。

～カンガルー島～

「気候変動/環境への取り組み（概要）」

「市長の構想」 紫葉彩央里

「ローカルビジネス」 武内友里恵

「エコツーリズム」 加藤春菜

「家庭」 岡田英里

「教育」 安藤穂乃佳

～日本～

「日本政府」 齋藤雅代

～サムソ島～

「サムソ島」 小島友梨香

～まとめ～



気候変動/環境対策への取り組み

1.Seal Bay

キングスコートからみて南西の位置にある。オーストラリアのアシカを保護することの重要性を訪問者にガイド形式で伝え、環境に対する理解と啓発を促進している。また、アシカの住まいになっており、アシカを近くで観察出来る場所である。また、近年動物のプラスチック誤食などが増えており誤食などを防ぐために、ここでは現在ペットボトルの使用禁止を検討している。

2.ティーズデイルご夫妻のエコハウス

今回の旅の案内人であるボブとジェニーの家である。また周りは木々に囲まれ、ペリカンラグーンを見渡すことが出来る場所である。ここでは、日常生活において取り組むことが出来る様々なエコ活動・環境保全対策を自宅及び自宅周辺で取り組んでおり、ゴミからたい肥を作るコンポストや、冬は暖かく夏は涼しいように設計されているなどがある。

3.KICE (Kangaroo Island Community Education)

4.Natural Resources Kangaroo Island

5.市長

3.KICE

2005年に創立された幼稚園から高校まである生徒が通う就学前・初等・中等学校。島内にはペネショール、パンダナ、キングスコートの三校に分かれており、今回訪問したのはキングスコートである。カンガルー島の歴史や島のコミュニティを反映したユニークな取り組みを各学年ごとに行っている。例えば、プラスチック問題を扱っている学年では、学内外で体験や実際にフィールドへ赴くなど生徒が実際に問題について体験的に考えている。

4.Natural Resources Kangaroo Island

政府と協力して環境問題について取り組んでいる組織である。カンガルー島自然資源管理委員会、環境水資源省を代表してカンガルー島に住むボランティアなどと協力を行っており、公有地の責任、持続可能な生産活動の促進、島の環境の保全と管理が含む様々なプログラムやプロジェクトを実施している。

5.市長

カンガルー島の市長であるピーター・クレメンツ氏は、カンガルー島をサステイナブルな島としてのイメージを作り続けるために、そして市民が社会環境などにおいて満足できるような政策を、デンマークのサムソ島をモデルとしながら、持続可能な取り組みを行っている。

参考資料

(1) 「オーストラリア政府観光局公式サイト」

<<https://www.australia.com/ja-jp/places/kangaroo-island.html>>(2018-10-30 参照)

(2) 「Seal Bay Conservation Park」

<<https://www.sealbay.sa.gov.au/plan-your-visit/about-seal-bay>>(2018-10-30 参照)

(3) 「Natural Resources Kangaroo Island」

<<https://www.naturalresources.sa.gov.au/kangarooisland/about-us/about-nrm>>(2018-10-30 参照)

(4) 「オーストラリア生活情報ウェブサイト」

<https://www.jams.tv/wp-content/themes/jams.tv/old_html/client/kangarooisland/feature/22908/22908.html>(2018-10-30 参照)

市長が考えるカンガルー島における環境への取り組み

9月4日（カンガルー島7日目）にカンガルー島で市長を務めているピーター・クレメンツ氏にカンガルー島の未来の構想や環境への取り組みについて市長自らによる講義を受けた。まず、市長の未来の構想について述べる。



市長の未来の構想としては、カンガルー島が人や環境に配慮した持続的な観光地になり、島民にも経済的、社会的、環境的利益を提供することである。その具体的な話として「橋かけプロジェクト」があった。4000億ドルをかけて、カンガルー島と州を繋げる橋を作り、経済活動をより活性化するという案があった。この案を行うことで観光客は増え、経済的に大きな利益があるが、一方で橋を作ることによって海洋生物を傷けたり、観光客が急増することで環境や地域コミュニティが崩れてしまう危険性があった。これらを危惧した市長は地域コミュニティと自然を守るために「橋かけプロジェクト」を中止した。この話から市長は地域コミュニティを大切にすることが持続可能な社会につながるということを軸として様々な取り組みを行っているのである。

次に、具体的な環境への取り組みについて述べる。

1. 空港

空港の取り組みとして、主に3つある。

1つ目は空港の電力は、ほぼ100%再生可能エネルギー（主に太陽光発電）が使われていることである。カンガルー島では、1997年まで石炭による発電に依存していた。しかし、デンマークのサムソ島から多くを学び、再生可能エネルギーを使うようになった。土地が広く、暑すぎない気候であるため太陽光発電がしやすい環境にあり、カンガルー島は人口比で比べるとオーストラリアで最も太陽光パネルが普及している。積極的に再生可能エネルギーの使用を推奨していることが分かる。

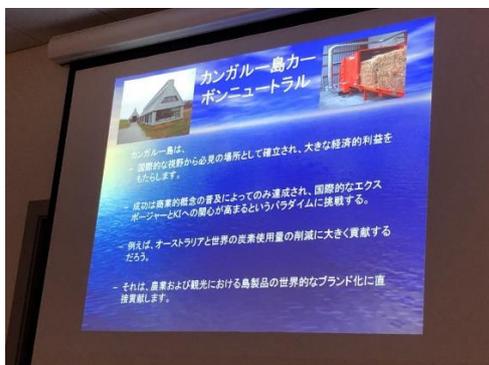
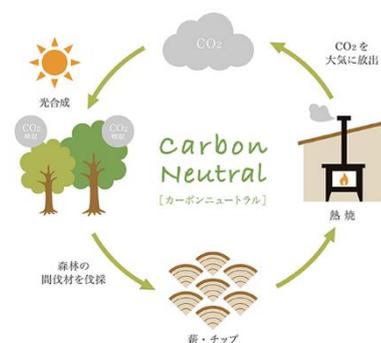
2つ目は、地域コミュニティを大切にするため、地元の芸術家が作ったアートギャラリーやコミュニティセンターがあることである。空港は島民の憩いの場ともなっていることが分かる。このようにして島民との強いコミュニティを作り、絆を深めることで気候変動に対してより大きなアクションを起こすことができるようになるだろう。

そして3つ目は、電気自動車の推進である。南オーストラリアでは2050年までに公用車の30パーセント（2,000台）の普及を目指している。また、カンガルー島では、電気自動車保有者は人口が約4,000人中約10名だそうだ。しかし、空港では、電気自動車を充

電する場所まで設けられている。他にも5つの観光地で充電する場所が既に設けられている。電気自動車の普及に向けて未来を見据えた取り組みであると思われた。また、エコツアーリズムプログラムの一環として、日本の三菱自動車のプラグインハイブリッド車である『アウトランダーPHEV』を観光客に貸し出しており、今後も電動車を活用していく計画がある。電気自動車のメリットとして、地球温暖化の原因となるCO₂、大気汚染の原因となるNO_x(窒素酸化物)やPM(粒子状物質)を走行中に一切発生させないため環境に優しいことである。ガソリン車ではなく、電気自動車を使用すると約半分のCO₂が削減される。しかし、日本では、電気自動車の普及率は0.1と低い。これはコスト面による問題が大きい。カンガルー島では自動車が移動手段となっているため、自動車における二酸化炭素排出量削減は課題となっている。電気自動車を普及するには日本と同様、電気自動車の価格面での改善が必要であると考えられる。

2. カーボンニュートラル政策

カーボンニュートラルについて説明する。カーボンニュートラルとは、カーボンとは「炭素」、ニュートラルは「中立」を意味して、消費行動によって排出されるCO₂の量と、植物が光合成によって吸収するCO₂の量が等しい状態のことをいう。



バイオマス

発電で集めた電力は島内だけでなく、島外への供給を目標としている。そのために、広大な土地を利用して植樹を行っている。カンタス航空のキングスコート線は、カーボンニュートラルで初めて運航される路線となり、南オーストラリア州政府と提携し、カンタス航空は新たな植樹プロジェクトをサポートすることにより、カンガルー島発着

のフライトを全てオフセットする予定である。バイオマス発電を行うと二酸化炭素の排出を抑え、資源を有効活用できる。しかし、バイオマス発電には資源の収集と保存にコストがかかる。そしてバイオエタノールの需要が急速に高まったことによる穀物価格の高騰とそれによる貧困層の飢餓が課題となっている。

まとめ

空港の取り組みを通して、カンガルー島では、広大な土地や涼しい気候を生かした再生可能エネルギーを使った電力が普及し始めていることが分かった。電気自動車においては、

充電施設を作るなど電気自動車に対して意欲的ではあるが、コスト面で普及が難しくなっている。同様にカーボンニュートラル政策においてのバイオマス発電も資源の収集と保存にコストがかかることが課題である。これらのことから気候変動に対してアクションを起こすときは経済の関わりがとても重要となってくることが分かる。また、電気自動車の普及など新しく環境の取り組みを普及させるには島民の理解が必要である。そして持続可能な観光地にするためにも島民の協力など地域コミュニティが大切であるだろう。自然エネルギーを使う時も森林を破壊しないように気をつけなければいけない。これらのことから持続可能な社会をつくるためには環境と人と経済のバランスが重要であることが分かる。

参考資料

(1)大和屋 図 引用

<<http://www.yamatoya-kk.co.jp/kenzai/images/environment/pic.png>>(参照 2018-11-15)

(2)Kangaroo island Council

<<file:///C:/Users/saori/Pictures/20170705%202016%20UPDATE.pdf>>(参照 2018-11-15)

(3)Make a difference - Council

<[Electionshttps://www.lga.sa.gov.au/page.aspx?u=7401&c=82611](https://www.lga.sa.gov.au/page.aspx?u=7401&c=82611)>(参照 2018-11-15)

(4)Peter Clements

<<https://peterclementski.wordpress.com/about-peter/>>(参照 2018-11-19)

(5)MAGX ニュース,「三菱自動車、オーストラリア・南オーストラリア州の電動車普及に協力」

<<https://mag-x.jp/2016/08/25/644/>>(参照 2018-11-22)

(6)Ischool 日本における電気自動車のシェア

<<https://ischool.co.jp/2017-05-31/>> (参照 2018-11-22)

(7)地球の自然環境問題

<<http://eco.macanow.com/word/keyword018.html>> (参照 2018-12)

ローカルビジネスにおける環境問題への取り組み

気候変動や地球温暖化は人間の日常生活によって進行していると言っても過言ではない。特に、環境の維持よりも利潤を追い求めることが重視されやすいビジネスと持続可能性は両立しがたいという印象があるのではないだろうか。しかしながら、カンガルー島ではビジネスとサステナビリティの共存関係が実現されていた。スタディツアー中に訪問したローカルビジネスを行う施設と環境問題への取り組みについて以下に述べる。

1.Choco' l Art & Coffee(コーヒーショップ)

カンガルー島、キングスコートの中心部にある大通りに位置するコーヒーショップは島内でローストした豆を用いる点が特徴の店である。環境問題への取り組みとして、マグやタンブラーを持参すると50セント割引のサービスを行っている。プラスチックごみを減らすことが狙いで、他にもコーヒー滓を店の花壇で再利用する取り組みを行っている。後者の取り組みは土地が限られている日本では難しいかもしれないが、前者の割引サービスはすでにSTARBUCKSやEXCELSIOR CAFFÉ、上島珈琲店、LOWSONのMACHI Café等様々な店舗で実践されている。



2.Fine Art gallery(画廊)

カンガルー島出身、または在住のアーティストたちの作品を展示・販売しているギャラリーである。一見アートとビジネス、環境問題は結びつきにくいですが、店主のフレッド・ピーター氏は自然の美しさやカンガルー島の風景を描いた作品の販売を通して環境を守る大切さを訴えている。彼自身も島の動植物をモチーフとした銀細工を製作して



おり、サステナビリティを重視していた。アートは真実を語ると仰っていたが、日本においても、芸術作品を通して訴えられることは多くあると考える。

3.Lions Op shop

国際組織のライオンズとボランティアが主体となって運営する Op shop は島内に点在しており、古着や古本、食器など中古品の買取と販売を行う店である。Op とは Opportunity(機会)が由来だと説明してくださり、使わなくなったものを再利用する(その機会を与える)ことでごみの削減を実現している。売上金はオーストラリア本土からドクターヘリを呼んだり麻疹の免疫薬を寄付したり、サルベージンアーミー (The Salvation Army、イギリス発祥の国際的団体) を通して国内外へ送金したりして活用している。環境問題とコミュニティの改善、国際貢献等を一度に行っている事例である。



4.The Lingrian Honey Farm

カンガルー島のミツバチのみを飼育する養蜂場である。島のハチはもともとイタリア固有種だが他の品種が混じらないようにしたため原産地のイタリアにも残っていない純粋な血統が維持されている。

こちらの印象的だった取り組みは島内の農家と連携して農薬からハチを守るというもの

だ。カンガルー島ではキャノーラ畑が広がっているがキャノーラはハチミツの原材料の中でも唯一農薬が必要な作物である。そのため農薬散布の際は養蜂場に連絡をする必要がある。最長で6 kmしか飛ばないハチの特性を生かし、別の農場にハチを移動させることで種を守っているのである。日本では動植物の外来種の増加が問題となっておりカンガルー島とは規模の違いはあるものの、ビジネスだけでなく生態系維持のために人間ができることがあると考える。



まとめ

以上のように、カンガルー島では様々なローカルビジネスにおいて環境への取り組みが実践されている。日本よりも人口が少なく、土地があり経済や産業の形態・規模が違うため応用できないと思われるかもしれない。しかしながら、規模が重要なのではなく環境問題に対して何らかの取り組みを実践し継続していることが重要なのである。

カンガルー島でこれらのお店や場所を訪問したことにより、サステナビリティとビジネスは両立可能であると確信することができた。すでに日本でも行われている取り組みをさらに発展させるとともに、新たに環境問題を改善するためにできることを始めなければならない。また、私たち消費者も環境に配慮した取り組みを行う企業を選んだり環境への負荷が少ない商品を購入したりするなど、目先の利益だけではなく将来の暮らしを見据えた行動が求められていると考える。

観光における気候変動に対する取り組み

～エコツーリズムの視点から～

私たちはカンガルー島でエコツーリズムについて学んだ。エコツーリズムとは自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること、観光によって資源が損なわれることがないように適切な管理に基づいて保護や保全をはかることをいう。体験を通して分かったカンガルー島での気候変動に対する観光の視点からの取り組みを紹介する。

1.日本が行なっているエコツーリズムとは

例として、1993年に世界遺産に登録された鹿児島県の屋久島を取り上げよう。樹齢7200年といわれる縄文杉の登山におけるエコツーリズムはトレッキングを目的とした観光客に非常に人気の高いものとなっている。トレッキングとは特に山頂にはこだわらず、山の中を歩くことである。しかし縄文杉の世界遺産登録後、大株歩道の利用者数は急増しそれに伴う歩道周辺への踏み込みや休憩利用により、土壌流出や木の根の露出、植生荒廃の進行、裸地の拡大などが発生し、利用を原因とする自然環境への影響が深刻な状況になっている。そのため過剰利用と利用マナーの低下を改善していく必要がある。

2.カンガルー島が行っているエコツーリズムとは

(1)人間と動物

Seal bayは観光地でありながらもエコツーリズムの実践を行っている。なぜなら、環境保全に徹しており、アシカは野生の本能に従い海や陸を自由に行動できる環境が整っている。そのために環境客はガイドと一緒になければ敷地に入ることができないのだ。他にも上空300km圏内での飛行を禁止している。また人間はフットパス（例1）と呼ばれる道を歩き、アザラシはもちろんのこと自然に気遣った形をとっている。このようにフットパスは様々な場所で使われており、オーストラリア政府が管理しており環境に対して理解が深いと言える。またフットパスはリサイクルや木で作られていて環境に適したものだ。他にもSeal bayではお土産もリサイクル素材で作られたものや、水筒など繰り返し使えるものを売り工夫している。

(2)人間と自然

例として Pennington bay という海岸では行くまでの階段（例2）を作り、自然にも人間にも優しい取り組みを行った。またこの場所の公共トイレはエコトイレであり、水を使わない。このようにエコトイレを置いている場所は日本に比べると圧倒的に多い。人間、自然、コミュニティが環境をよりよくする取り組みの一つだ。そのため地元の人、観光客が少しでも環境に興味を持てるように絵を使って自然の大切さ、動物のあり方を紹介する活動も行っている。

3.まとめと課題

日本とカンガルー島の比較を行うと、日常生活の中でエコな体験ができる環境かそうではないかという点に大きな違いがあると考えられる。また、日本は利益を求めた活動が多いため、観光客の増加のために環境を傷つけてしまっているという現状がある。カンガルー島では動物や自然の優先順位を高くおいて実践を行っている。人間と動物の関係から言えることは人間の利益や欲を第一に考えるのではなく、生物多様性を大切にすることが共生すること、環境をよりよくすることに繋がるということだ。

一方で、ボブ・ティーズデイル氏はエコツーリズムの課題も述べていた。それは「車は多くの排気ガスが出る」ということだ。カンガルー島での交通手段は車がほとんどだ。そのため電気自動車が出回ることが課題だという。価格が高いこと、充電する施設が少ないことなどが挙げられる。このように課題はありながらも、エコツーリズムの実践をコミュニティで行なっている。ツーリズムと環境保全のバランスを取ることがより良い環境を作ること、気候変動を抑えることに繋がるだろう。

このようにエコトイレを置いている場所は日本に比べると圧倒的に多い。人間、自然、コミュニティが環境をよりよくする取り組みの一つだ。そのため地元の人、観光客が少しでも環境に興味を持てるように絵を使って自然の大切さ、動物のあり方を紹介する活動も行っている。

例 1



Seal bay での Footpath

例 2



環境保全のために作られた階段

参考資料

(1)屋久島世界遺産センター

https://www.env.go.jp/park/yakushima/ywhcc/ecotour/jyoumon_e.htm(参照 2018-12-03)

(2)環境省 エコツーリズム

<https://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/>(参照 2018-12-03)

気候変動に対する家庭での取り組み

カンガルー島の家庭では、日々の生活の中で自然のことを考えた多様な取り組みを実践している。またそれによって一つ一つの取り組みが家庭の中で大きな好循環が生まれている。その好循環を生み出している代表的な取り組みをいくつか紹介しよう。



1.家庭菜園

カンガルー島ではどの家庭においても、自宅の庭で野菜や果物を育てている。購入して消費をすることばかりに頼らずに、自分の庭で採れた食材を利用して食事をする、まさに自給自足の生活を多くの家庭が実践していた。さらに、野菜や果物を育てる際、コンポストによってできた堆肥を利用しているため、良質な野菜や果物を育てることができるのだ。食べ物と気候変動の関係でしばしば言われることは、フードマイレージの問題である。食べ物を運ぶ際に出される二酸化炭素が気候変動の原因の一つになっているが、家庭菜園を行うことによって輸送の手間が省かれて二酸化炭素の排出を削減できるため、家庭菜園は気候変動の緩和にも繋げることができるのだ。



2.コンポスト

コンポストとは、皮などの食べ物の余った部分や食べ残ってしまったものをタンクに入れて、発酵させてたい肥にすることである。こうすることによって、生ゴミが減りそれを燃やすための二酸化炭素を抑えることができ、気候変動の緩和に繋げることができる。また、コンポストによってできた堆肥は、豊富な栄養分を含んでいるため良質な肥料になることができ、自宅で育てている畑や花壇の肥料になり、再びより良質な野菜や果物を育てることができる。



3.発電と貯水タンク

私達が生活する上で必要不可欠な水とエネルギーも、カンガルー島では自然からの恵みを利用して生活していた。飲料水やお風呂・トイレの水などの生活用水は、雨水から得た水を貯水タンクに貯めて、それをろ過して生活の中で使用している。また、電気や室内の温度調整のために使用するエネルギーも、屋根に設置されたソーラーパネルによって生み出される自然エネルギーを利用して、日々の生活を送っているのだ。二酸化炭素を多く排出する原発や石炭火力発電よりも、自家発電をして環境に配慮したクリーンな自然エネルギーを使用することは、地球に負荷をかけないだけでなく、山火事などの



災害が起きても電気が使用できなくなる心配がないため、強く対応することができる。まさに、気候変動の適応と緩和の両方を実践することができる取り組みである。

このようにカンガルー島の家庭では、家庭でできる環境に配慮した小さな取り組みを行うことで、1つの好循環を生み出すことができる。自然から得た水やエネルギーで野菜を育て、その野菜で食事をし、そして残った野菜をコンポストして堆肥を作り、その堆肥で再び良質な野菜を作る。このような小さな取り組みを数多くすることで、自然の中で生活することを実践していることが分かった。

KICE (Kangaroo Island Community Education) の

環境問題に対する取り組み

KICE は、カンガルー島にある唯一の初等中等学校であり、島内には3つのキャンパスがある。ここでは、幼児から高校卒業までの生徒が1つの校舎で学んでおり、発達段階に合わせたサステナビリティ教育が行われている。地球課題の問題を生徒が自分ごとに捉え自発的に思考し行動できるよう啓発すると共に、自身の興味・関心に基づいた生涯の課題の取得を目指した教育が実践されている。そして、それを育むために、下記のようなアプローチが行われている。

- 1.カンガルー島の特性を生かした環境教育
- 2.教科の横断的な教育
- 3.活発に活動するための環境整備

KICE の生徒は幼少期から島という特性を生かして、野生の生物の調査や生物たちに影響を与える問題について学んでおり、地球が抱えている問題に対しての表現手段は多岐にわたっていて様々な教科を通して横断的に学習している。例えば、(図1)のような動画制作を行う上では、パーソナルコンピューターを利用するためのスキルが必要とされ、展示作品を制作する上では、図画工作のスキルや知識が必要になる。また、完成した作品をプレゼンテーションする能力として、国語の力も求められるだろう。教科を横断した環境教育により、包括的に自身の課題に対して取り組むことができる。そして、このように生徒たちが活発に活動を行うためには大人たちの生徒たちに対する接し方が重要であることがわかった。子どもとしてだけでなく、自身たちと対等の存在であり一人の研究者として接しているため、生徒は自身が尊重されているということを感じ、安心して研究を追求することができる。同時に、地球課題に対して意識の高い大人がいるということは、生徒の視野を広げることにも繋がるだろう。また、生徒たちがより身近に感じられるよう毎週水曜日に開催される「ヌードフードデイ」という活動や敷地内に何箇所もプラスチックを再利用したベンチがある。「ヌードフードデイ」は、プラスチック容器を使わずにランチを持ってくるよう推奨されている日である。生徒自身にランチの形式の選択を

委ねており、生徒だけではなくその家族もプラスチックの問題について考えることができる。ベンチは、学校で使われているプラスチックをまとめてアデーレード市の工場に持っていき、加工して学校で再利用している。

KICE では、周囲の環境を整備しつつ、幼児期に好奇心をくすぶり、卒業までに自身の興味・関心のある問題を見つけ、自身が生涯探求のできる課題を持つことができる教育を実践している。このように、幼少期から主体的に行動し、表現をしている学習の仕方は、日本の教育が目指している主体的で深い学び(アクティブ・ラーニング)のロールモデルになるのではないだろうか。



(図1)

低学年、高学年の生徒
たちが海洋プラスチッ
ク問題について制作した
動画

参考資料

- (1)'Nude Food Day' (現地把握資料)
- (2)"Kangaroo Island Community Education" <<http://kice.sa.edu.au>> (参照 2018-11-15)
- (3)「新しい学習指導要領の考え方-中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ-」
<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf> (参照 2018-12-5)

日本政府の環境問題に対する取り組み

1.はじめに

日本は COP と呼ばれる「気候変動枠組み条約締約国会議」に参加している。2015 年にパリで行われた COP21 では、パリ協定により温暖化対策についての国際枠組みが採択された。それに伴い日本でも気候変動に対する取り組みが行われている。今回は 3 つの省庁に焦点を当て日本政府としての取り組みやそれらに対する考察を述べる。

2.各省庁の取り組み

(1)環境省による取り組み

地球温暖化対策推進法と地球温暖化対策計画を中心に取り組んでいる。具体的には、中期目標である 2030 年に 2013 年比で温室効果ガスを 26%削減するための施策を明示し、2050 年までに 80%の削減を目指している。その一環として再生可能エネルギー・省エネルギーの技術開発に取り組み、地球に優しいエネルギーとして普及を目指すと同時に、化石燃料に環境税という形で課税し再エネを選びやすいような政策をとっている。他にも温室効果ガス排出量取引制度を企業間で行える制度や環境関連団体との意見交換も行っている。

(2)外務省による取り組み

地球環境を考える上で外せない動きになるのが、国際社会での低炭素化に向けたエネルギー転換の流れである。2017 年には外務省主催による国際シンポジウムが開催され、時代に合った形でのエネルギーや資源に関する外交を強化することを示した。また東日本大地震の原子力発電事故によって、エネルギー選択に「安全性」という価値観が生まれたことから日本らしい情報発信を強化し外交に取り入れることを目指している。

(3)農林水産省による取り組み

温室効果ガスの排出を抑えるために、少ないエネルギーで動く農機や漁船を開発している。これは省エネルギーな農業や漁業を行うための緩和策である。また、排出した温室効

果ガスを吸収する環境作りも行っている。吸収源になる森林の整備や自然の元になる土作りを行い、よりよい吸収源になるような努力をしている。

3.取り組みに対する考察

今回扱った3省庁の政策の多くは、温室効果ガスを削減するためのエネルギーに関連した取り組みであった。その具体的な進捗状況については平成30年3月に地球温暖化対策推進本部から発表された、2016年度に行われた点検による結果を元に考察する。まず中期目標である2030年に2013年比で温室効果ガスを26%削減する目標は、2016年度時点で6.2%減少しており順調であるといえる。要因としては再生可能エネルギー導入が拡大したことや原子力発電の再稼働により、エネルギーを生成する過程での二酸化炭素排出量が減少したからである。

これらの結果から感じたのは「持続可能性」という観点からみた、日本のエネルギー供給に対する意識の低さである。エネルギー消費大国でありながら、そのほとんどを化石燃料の輸入に頼り、火力発電を行うことで電気を生産している。それは気候変動の深刻化に繋がるだけでなく、石油危機などに見られるような国際情勢の影響も受けやすい。また温室効果ガス排出量の減少には成功しているが、大事故の原因にもなった原子力発電の力が大きいだろう。地球環境への悪影響や事故が起こり得る可能性を照らし合わせると持続可能性はかなり欠けていると言える。これからの時代には「持続可能性」という価値観が必要不可欠になっていく。今一度地球市民としての意識を持ち、日本政府としての取り組みを考えるべきではないだろうか。

最近ではSDGsと呼ばれる「持続可能な開発目標」が世界で大きく注目されている。SDGsとは、2015年にニューヨークで行われた「国連持続可能な開発サミット」で採択された17の目標と169のターゲットから成る、人間・地球及び繁栄のための行動計画である。今回私たちが学びの中心とした気候変動も13番目の目標として設定されている。日本でも内閣府によって様々な取り組みが為されているが、上記のように残されている課題は少なくない。より一層力の入った取り組みが期待されるべきだろう。

参考資料

(1)環境省ホームページ

< <https://www.env.go.jp/seisaku/list/ondanka.html> > (参照 2018-11-25)

(2)外務省ホームページ

< <https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/kiko/index.html> > (参照 2018-11-25)

(3)農林水産省ホームページ

< <http://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/pdf/tekiou.html> > (参照 2018-11-25)

(4)地球温暖化対策推進本部「2016 年度における地球温暖化対策の進捗状況について」環境省, 2018 年

(5)農林水産省「農林水産省気候変動適応計画」, 2015 年

サムソ島における環境問題に関する取り組み

1.はじめに

1996年、デンマークでは「エネルギー21」を決定した。この政策では五つの原則を設けるとともに、再生可能エネルギーの比率を上昇させる事などが目標である。またこの政策が契機となり、政府による「2008年までに新エネルギー100%を目指す島のコンペティション」が国連気候変動枠組条約(UNFCCC)を受けて実施された。サムソ島はこれに応募するために「サムソ・デンマークの新エネルギー島プロジェクト」を計画をした。この計画は地域と市民の協力による取り組みを重視し、地域資源の現状など市民と意見交換を行いつつ、現状と市民の要望に沿ったものであり、翌年には政府により採択された。

また、1999年には、EUの「新エネルギー100%を目指す100のコミュニティー」にも選出される。同島では、2008年までの10年間で電力・熱エネルギーの100%を新エネルギーで賄う事を目標とし、電力・熱エネルギー需要の100%を新エネルギーで賄い、効率的エネルギー利用の実現を目指した。

2.見込みと各取り組み

電力・運輸交通部門・熱エネルギー一年間の目標設定時の使用（消費）量や供給目標を定めた。計画実現のためには日本円で総額約110億円の投資資金を民間の投資やまた、約12%に関してはEUやデンマーク政府の補助金などで資金を賄った。今回の民間投資で個人や風力組合による出資、建設など含む新規事業樹立、また新エネルギーの取組み視察の目的の人々を対象とするサービス産業の経済効果が発生する事など様々な角度から見込まれた。

サムソ島では様々な取り組み状況の詳しいものは以下のとおりである。

(1)エネルギー・環境事務所

同プロジェクトの啓発活動を主な事業としたエネルギー・環境事務所は、誰でも参加できる研修を行っている。この研修では参加者が各新エネルギーの現場を実際に見学などを行っている。スタッフはホームページからの情報発信などを行っている。

(2)サムソ・エネルギーカンパニー

1998年、同組織は新エネルギー島プロジェクトの計画を実行するためのエネルギー・環境事務所と一緒に設立された。またこの組織なども含む地方自治体の代表者で構成されており、中心的集落で地域熱供給の拡大など事業を展開している。

(3)太陽光パネル設置計画

太陽光パネル設置計画では「太陽エネルギー2000」という計画のもと、島内2,000ヶ所に太陽光パネルの設置を計画した。発電した電力を固定料金買取制度に基づく価格で売電する事が出来るため、投資利回りを得られるが、設置数は3件に留まっている。

(4)パームプランビュー地域熱供給プラント

このプラントでは木質バイオマス（藁）による地域熱供給プラントである。同プラントは温熱を供給している。島内ではこのプラント以外に3ヶ所のプラント、大規模農家による熱供給事業が行われている。しかし、島内の熱需要を全て賄うにはまだ至っていない。また燃料は藁の他に熱源として減反政策で生じた空き地でエレファントグラス（牧草に使われる草）を栽培するなど取り組んでいる。

(5)菜種油回収システムおよびバイオディーゼル自動車

島内の移動手段は基本的には自動車であり、そのほとんどがガソリン自動車である。電気自動車や菜種油を燃料として走るバイオディーゼル自動車が1台ずつ登録をされている。

(6)ノルドビー地域熱供給プラント

中心集落でバーク（原木から剥いだ樹皮）をバイオマス原料とするボイラーと太陽熱パネルによって地域熱供給を行うプラントがある。地域熱供給プラントは、基本的にPCなどITでの管理が可能な熱供給管理体制が敷かれており、定期的なメンテナンス、燃料補充および異常発生時では、スタッフによる対応が行われる。

3.取り組みに対する考察

達成期間が2008年までである同プロジェクトの結果は、2004年10月の時点で既に電力に関しては100%以上を新エネルギーで賄っており、目標を前倒しで達成している。ま

た、ノルドビー地域熱供給プラントでは、バークを燃焼させるボイラーは同地域で年間に消費されていた石油燃料を互換した。その後、100%自然エネルギーを実現する。

これらを元に考察すると、まず今回まだ期間がある中で達成したものがあるのは、市民とサムソ島が一丸となって取り組んだ事が一番ではないだろうか。エネルギー・環境事務所は、誰でも参加できる研修を行って実際にエネルギー・環境事務所では、誰でも参加できる研修を行った事や市民との意見交換を行い、現状と市民の要望に沿った計画などお互いに自治体と市民同士で寄り添ったからこそ成功したように考える。

そもそもなぜ、新エネルギーに変えていけないといけないのか。CO₂は気温上昇など私達に大きく影響を及ぼす。しかし、CO₂は私達の身近な生活活動や産業活動などあらゆる所で発生してしまう。生活活動で排出されるのは仕方がない。だからこそ少しでも排出量を減らすための努力を多方面からしなければならないのではないかと考える。

日本はエネルギーの自給率が8.3%（2016年現在）にとどまっており、自然エネルギーの導入ではあまり進んでいない。

2011年の東日本大震災後にすべての原子力発電所が停止した影響もあり、火力発電所の稼働が増えたことで、2016年度には化石燃料への依存度が89%となっている。化石燃料の使用は多くの温室効果ガスを排出することから、環境問題に密接に関係しているため削減に向けた努力が必要である。そのためにも再生可能エネルギー普及を急ぐべきではないだろうか。もちろんコスト面などの課題点や地域の人や環境に寄り添うような取り組みを日本は行っていくべきではないだろうか。

参考資料

(1)『平成16年度新エネルギー等導入促進基礎調査（省エネルギー・新エネルギー事業のレジャー資源化に関する総合調査）』

https://www.jams.tv/wp-content/themes/jams.tv/old_html/client/kangarooisland/feature/22907/22907.html

(参照 2018-11-20)

まとめ

これまでに研究してきたそれぞれの環境の取り組みは、政府、教育、生物多様性、ビジネス、家庭の5つの観点に分けることができる。どの取り組みも、気候変動への対策としてカギとなる「緩和」と「適応」につながっていることが分かる。前者の緩和とは、温室効果ガスの排出量削減と吸収のための対策を行うことである。適応とは、既に起こっている気候変動の影響の軽減とその対策、そして新しい気候条件に対応していくことである。

まず緩和策として、カンガルー島・キングスコート空港の使用電力を全て太陽光発電で賄っていたり、電気自動車の普及やカーボンニュートラル政策などを実践していたりした。これらは二酸化炭素削減のための取り組みであり、地球温暖化防止に繋がっている。

適応策としては、現状を把握し島民のコミュニティを生かした取り組みが行われていた。例えば、カンガルー島において動物や自然の優先順位は非常に高く、尊重されており、彼らと人間が共生することが当たり前となっている。また、教育においては幼児期から野生動物を調査したり自分達で動画を作成したりと、教科横断的な環境教育を行っている。早期から環境への取り組み方やスキルを磨くことで、大人になってから環境問題に対して柔軟に対応ができるようになることを考える。他にもローカルビジネスにおいて、コーヒーショップでマイカップを持っていったら50セント割引される制度がある。アートギャラリーでは、芸術作品を通して環境問題を伝える取り組みが行われていた。このように、生物多様性を大切に、子どものころから環境教育を受け、置かれている現状を島民同士で共有し合うことで強いコミュニティが生まれ、柔軟に気候変動へ適応できるのである。

全体を通して、環境への取り組み方は異なるが、全てがサステナビリティを軸として将来を見据えた環境に良いアクションを起こしていることが分かる。小さなアクションでも多くの島民が意識を高く持つことで大きなアクションにつながるのである。環境のためだけでなく、笑顔溢れる島民や野生動物、広大な自然など、今あるカンガルー島の幸せを永続的に守るために一人ひとりが危機感を持って行動をしているからこそ、島に強いコミュニティが築かれ持続可能な社会の実現を可能にしているのではないだろうか。

参考資料

全国地球温暖化防止活動推進センター（JCCCA）

www.jccca.org/ipcc/ar5/kanwatekiou.html（参照 2018-1127）

9.感想

岡田英里「安心感の先にあるもの」

紫葉彩央里「人に伝えること」

武内友里恵「守りたいもの」

安藤穂乃佳「あたり前ってなんだろう」

加藤春菜「小さな働きが大きな成功に」

小島友梨香「Changed my life」

齋藤雅代「DON'T BE SELFISH!!」

安心感の先にあるもの

国際交流学科 3年 岡田英里

カンガルー島で過ごす日々の中で、私は心の緊張がほぐれてほっとした瞬間が2つあった。そしてそれは、私がこれからも生きていく上で大切なことに気付かされた瞬間でもあった。

まず1つ目は、気候変動対策を頑張ろうとしなくていいのだと分かったことである。カンガルー島では、市役所やローカルショップ、学校や家庭などで行

っている環境に配慮したサステナブルな取り組みを数多く見ることができた。どれも日本では見ることができない素晴らしい取り組みであったが、驚くことに、それらをどんな人も当たり前のことのように自然体でやっていたのだ。

私はカンガルー島に来る前、5月に大学で行われたエシカルフェスタでの経験を通して、気候変動問題に出会った。そこからこの問題をどうにかしたいという使命感と責任感に駆られ、どこか必死になって自分に何ができるのかを考えていた。しかし現地でその姿を見て、気候変動対策は気負わずに自分の足元からできることを実践していけばいいのだと分かり、安堵の気持ちを抱いた。気候変動に対して誰もが解決の一部になることができると分かった今、大学生という立場から私は大学でどんなことができるのだろうと、「気候変動に対するアクション(Climate Action)」を考えることが以前よりも肩の力を抜いて、楽しく考えることができるようになった。また私は、誰でも解決の一部になることができるということを、多くの人に伝えていきたいと思った。

2つ目は、カンガルー島に温もりと人に頼ることができる空間があったことである。私は日本にいて、家族と住むことができ自分の好きなことができ、そして何不自由なく生活することができてとても幸せだ。しかし、そんな日々の生活の中で、私は心のどこかに重荷を抱えながら生きていると感じることがある。その重荷とは、温もりのない社会に生きているということである。大都会で生活していると、人々が周りを気にせず我が先にと動き、時間に動かされていて常にピリピリしていて、何かに追われるように余裕がなく生きている光景を目の当たりにすることがある。そしてそのような光景を目の前で見て、私は時々こう思



うのだ。「なんて冷たい社会なんだろう」と。便利で自由があって誰もが住みやすい社会のはずなのに、幸福感に欠ける今の社会に深い疑問を感じていた。しかし、そのような思いを抱えながら生きている私にとって、カンガルー島はとてもほっとする空間であり、救われた瞬間であった。それぞれに仕事や日々の生活がありながらも、相手のことを気にかけて人と人との繋がりを大切にできる空間がそこにはあった。またそのような空間があるからこそ、誰もが相手に頼ることができて支え合いながら生きている社会が、穏やかな温もりと共にそこにはあった。私はそれこそが、人間本来の生き方であると感じた。忙しい現代社会に何が足りないのか、カンガルー島の温かなコミュニティに触れたことで、私は何かヒントを得ることができたような気がした。

このように、スタディーツアーを通して、私は自分が今まで感じていたことや疑問に思っていたことに安心感を得ることを通して、前向きに考えることができるようになった。そしてそれは少なからず、自身の自己変容や価値変容に繋げることができたのではないかと思う。だが、いったいなぜカンガルー島はこんなにも安心感を得ることができる島なのだろうか。それは、島民一人ひとりが生きることを楽しんでいるからである。この旅の中で、私は数えきれないくらい多くの人々に出会った。子どもから大人まで、そして若者からお年寄りまで実に様々な人に出会ったが、彼(女)らにはある共通点があった。それは、どんな人にも幸せな雰囲気や表情があったことである。自分のしていることやしてきたことを、溢れんばかりの笑顔で話をしている姿は、自分の経験に誇りを持っていることがひしひしと伝わってきて、まるで生きるということを楽しんでいるようであった。子どももご夫婦も店員さんもお役所の人も、どんな人も自分がしていることに対して楽しさと自信で溢れていた。日本ではなかなか感じるができないこの様子には私は圧倒されてしまったが、そのように自分の人生を楽しむことができているのは、きっとそれぞれにとって生きがいとなるものや、大切なものがあるからかもしれないと感じた。

'Discover the things that really matter in my life',

「自分の人生で本当に大切なものを見つけなさい」

これは、カンガルー島に唯一ある空港で私が出会った言葉である。自分の人生において本当に大切なものは何か。カンガルー島の島民一人ひとりがそれに気づいているからこそ、人々は生きることを楽しみ、そしてそれによって安心感で溢れていてレジリエンス(しなやかな強さ)が備わった地域社会が、生まれているのではないかと思った。

地球規模課題である気候変動は、今や地球の未来を揺るがす深刻な問題である。その解決のためにも私達は自身のライフスタイルや社会のあり方を見直し、変化していく必要がある。カンガルー島ではその一つの方法として、自分の足元からできるサステイナブルな取り組みを多く見ることができた。しかし、私はそれだけでなく、誰もができる気候変動に対する取り組みがあることに気が付いた。それは「自分の人生において本当に大切なものは何か」を一人ひとりが考えることである。本当に大切にしたいものや守りたいものは何なのか、一歩立ち止まって考えることが、気候変動の解決のためだけでなく、現代に生きる私達にとって今一番必要なことなのではないかと私は思う。また、それこそが誰もができる Climate Action であり、サステイナブルな社会を築いていくことに繋がるのではないだろうか。

最後に、このスタディーツアーでお世話になった現地の皆様、事前学習・事後学習でお世話になった皆様、一緒にスタディーツアーに参加したメンバー、出発前から帰国後まですべての段階でお世話になった永田先生・木村先生、そして貴重な経験をさせてくれた両親に心から感謝致します。ありがとうございました。

人に伝えること

教育学科教育専攻 3年紫葉彩央里

私がカンガルー島で最も学んだことは、人に伝えることの大切さである。今回、たくさんの場所に案内してくださったボブが言っていた「私が持っているのは、経済的な豊かさではなく、人の豊かさがある。」という言葉が印象的である。彼は、家族、友人が財産であると言っていた。また、私達に色々な場所を案内してくれている中で出会ったツアーガイドの方やワイルドパークの人など出会いはとても大切な時間であったということをボブから教わった。普段私が生活しているとき家族や友人以外の人と交流を持とうと思うことが少なかった。しかし、カンガルー島に行ってからこの考えは変わった。ボブとジェニーは、今の快適な暮らしのことだけを考えるのではなく、何十年先の快適な暮らしも見据えつつ、この先の未来の人々や自然、動物を守り、今から環境に配慮した生活を続けることが大切だということを実践しながら島民や観光客にそのことを伝え、島全体のコミュニティ作りをしていた。彼らは、実践として自宅の電力はほとんど再生可能エネルギーを使い、残飯はコンポストに入れて肥料にしている。また、水は雨水を貯水し、自分達の土地で植樹も行っていった。これらの取り組みは、全て未来の環境を守ることに繋がっていて、必要不可欠な取り組みであるということを実地の小学生や島民、観光客に伝えることが持続可能な社会の構築につながると私達に教えてくださった。カンガルー島ではボブやジェニーの人を大切にしている心や島民同士の信頼関係があるからこそ、島民の方々も気候変動を身近に感じ、高い意識を持ち、お互いが影響し合っているのであると思われた。私もカンガルー島で学んだことを大学の人やより多くの人に伝え、みんなで団結して持続可能な社会につながるように環境を考えながら自分の行動を見直していきたいと思うようになった。



また、最終日に島民のコミュニティの強さを感じる瞬間があった。最後の日の発表の時、英語発表内容をきちんと伝えられるか不安になりながら、発表するときがきた。島民の方々がとても優しく温かい目で見守ってくれていた。その時に、自信を持って自分のペースで頑張ろうと思うことができた。最後お別れの歌としてカントリーロードと一緒に歌った時も島民の方々の優しさや温かさで溢れていて、一人ひとりの温かさが人々との出

会いを生み、コミュニティをつくっていくのであったと感じた。「人の豊かさ」を持つ人とは、周りの人との出会いを大切に信頼関係を築き、人に良い影響を与えることができる人であるとカンガルー島へ行って気づかされた。これらの体験から感じたことは環境を守り、持続可能な社会を構築するためには人との関わりや伝えることはとても大切であるということである。

最後に私自身の変化についてである。カンガルー島へ行く前は、気候変動のことを勉強しても身近に考えることができず、英語力も不十分で不安を抱えたまま行くことになった。カンガルー島に行ってから、スケジュールがみっちり詰まっていた、環境の取り組みの専門家や実践している人のお話を聞く機会がたくさんあった。そこで一番苦労したことが英語の聞き取りであった。先生の通訳があって内容をやっと内容を理解できていた。同じ学年の子は、質問も積極的にできているし、英語も聞き取れていて自分だけ遅れを取っていると思い、焦りが増した。そして、7日間しかない中で自分が何も変わらないならば来た意味がないと思い、質問したいときはしようと決め、2日目からは質問するようになり、伝えようとする積極性がついたと思う。

このスタディツアーは私にとって、人生で一番濃い10日間になった。もっと英語を勉強し、コミュニケーションを取りたかったという後悔は残るが、積極的になれたこと、尊敬する仲間に出会えたことはとても大きな出来事であった。参加して良かったと心から思う。また、カンガルー島に戻り、今回学んだことを自分の生活に生かし、成長できたことの感謝をお世話になった方々に伝えられるように気候変動による環境問題についてもっと学んでいきたい。

守りたいもの

上智大学総合グローバル学部3年 武内友里恵

オーストラリアという国自体は非常に有名だが、南オーストラリア州のアデレード、からさらにプロペラ機で30分飛んでたどり着くカンガルー島はあまり知られていない島である。しかし、初めて訪れたカンガルー島で過ごした一週間は短いながらもとても濃い日々で、日本に帰国したくないと思うほど私にとって充実した経験となった。

今回のスタディツアーはSDGsに関連し、その中でも特に気候変動に注目してカンガルー島での実践例などを学ぶことが目的であった。そのうえで重要なキーワードは

Sustainability、持続可能性である。カンガルー島には気候変動への対策だけでなく様々な場面において Sustainable な暮らしが実践されていた。具体例として Petite Provence, Ambulance, natural Resources を取り上げる。まず一つ目の Petite Provence では一般の家庭で水・エネルギー循環型の生活を実現できることを学んだ。大きな雨水タンクにためられた水は生活用水として利用され、一ヵ所に集められたのちに自宅近くの農園の肥料となる。またエネルギーは太陽光発電で賄っており、一年を通してガスを2缶しか使っていないということが衝撃的だった。循環型の家を個人で実現することは難しいという先入観があったが、日本でも実践する可能性を感じることができた。

二つ目の Ambulance は救急センターである。カンガルー島には総合病院が一つしかなく、決して小さいとは言えない島で事故や急病人があったときにはボランティアの救急隊員が活躍している。島には4つの Ambulance があり、彼らは仕事と掛け持ちながら緊急時の対応を行っている。私たちが訪問した際は心肺蘇生法を習ったり救急車を見せていただいたりしたが、自発的に明るくボランティア活動を行っている姿勢が印象的だった。島の人々の持続可能性を確保するために彼らのようなボランティアの存在も欠かせないのだろうと考える。

三つ目の Natural Resources はカンガルー島の中心部にある自然資源の保護等を行う団体で、勤務している人々は南オーストラリア州の地方公務員という位置づけになる。そこ



では、カンガルー島の自然保護のために海で海草の植樹を行っていることや仕事に就けなかった若者たちに自然保護の職業を提供していること、外来動物である野良猫から島固有の動植物を守る活動などについてのお話を伺った。印象に残った点は、運営資金が足りているとは言えないため連邦政府から助成を得るためにラムサール条約などに着目して活動を発信していること、気候変動に関心を持たない人々を巻き込むために島の地図を作成し環境や動物について伝えようとしている点である。また、環境保護活動を通して経済や農業を活発化させることも重視しており、ハチミツなどカンガルー島独自の産品をブランドとして売り出していた。自然保護はカンガルー島だけでなくどの国においても重要な課題であるが、あまり関心を持たない人々を巻き込むのは容易ではない。しかし、この施設ではセミナーを開いたり関心のある人から無い人へ活動が波及していくことをめざしたりして、持続可能性の維持のために様々な努力をしていた。自分にとって危機感の感じられる問題でないと行動に起こしにくいのが、植樹などを通して意識変容を目指す点が参考になった。

以上のように、一週間で様々な場所に訪問した中で3ヶ所のみを紹介したが、他のどの活動も何らかの形で持続可能性に関連していた。こうした活動が積極的に行われる理由には、島の規模や人口などではなく、人々の熱意があるからだと感じた。カンガルー島固有の豊かな自然や文化に対する熱意は島への愛とも言い換えることができ、それによってコミュニティのつながりや Resilience、子どもたちへの教育が持続可能性を大切にしたものになっていると考えた。一方で日本を顧みるとき、地球の環境を守るためにシングルユーズのプラスチックを減らそうとする姿勢が少なかったり便利さを追求しすぎたりする面があるのではないかと感じる。身のまわりの環境や人々に対する愛着を持つことで持続可能な社会をつくる動きは活発になるだろうし、カンガルー島で多彩な実践を体感する機会を得た私たちがそのために関われることは多くある。カンガルー島に滞在した時間は長いと思われたがとても短く、あっという間に過ぎるほど充実していた。この経験を自分のものだけで終わらせず、これからの気候変動への対策や教育に生かしていきたい。

あたり前ってなんだろう

教育学科教育学専攻 2年 安藤穂乃佳

カンガルー島では、普段日本で過ごす日常とは大きく異なっているため新しいこと・ものとたくさん出会うことができた。毎日が驚きの連続であり、島で過ごした日々は非日常的な感覚に近い。そんな生活だからこそ改めて見つめ直すことができたことがある。それは、自身の価値観についてだ。怒涛のように新しいものと出会う中で、特に鮮明に思い出せ、価値変容するきっかけになったことが2つある。



1. 子どものプレゼンテーションする姿

カンガルー島の学校である KICE に訪問した際、小学校低学年に該当する生徒たちが海洋プラスチックについて啓発するような動画を見せてくれた。それは、大人が制作したのではないかというくらい立派な動画で「子どもなのにすごい」と感じた。一見、何の変哲もない感想だが、私の中で「子どもなのに」という部分が引っかかった。何故ならば、自身が子どもの能力・可能性について過小評価をしていたことに気づいたためである。カンガルー島の大人たちは、生徒に対して誇りを持ってはいても、過小評価をすることはない。子どもたちの周りにはいるべき、正しい大人の姿を見せられた瞬間であった。

「〇〇なのに」というような他者をカテゴライズして測るということは人が成長する上で、ない方が良く感じた。

2. 孫を想うボブの姿

今回の案内人の一人であるボブは、気候変動に対してとても危惧している人物である。そんな彼が話してくれた気候変動にまつわることで最も印象的だったものが、孫を思う話である。彼は、現在と孫が大人の時では、海面の水位が異なり、私たちが普通に感じている今の生活があたり前ではなくなるという話をしてくれた。自身の孫を想って、気候変動の影響を私たちに話してくれたボブの姿は鮮明に残っており、また、ここまで未来について想っている大人を私は見たことがなかったため、その姿は今でも強烈に残っている。

それ以降、自然から与えられる感動を感じた時は、未来でもこのような感動を味わえるこ

とができるのかと考えるようになった。それは、ボブの話をきっかけに、自身の中で気候変動に対する意識が変わり、知識だけではなく、心で感じるようになった証拠であると思う。

カンガルー島は、「あたり前ってなんだろう」「普通ってなんだろう」と、私の中にある凝り固まった価値観をほぐしてくれた場所であり、気候変動を本当の意味で自分ごととして捉えられるようになった場所である。そんな、カンガルー島に招待してくれたボブとジェニーを始め、機会を作ってくださった永田先生、一緒に学びを深めてくださった木村先生、たくさんサポートしてくれたメンバー、そして、このスタディツアーに携わってくださった方々に心から感謝したい。

小さな働きが大きな成功を生む

教育学部教育学専攻 10170155 加藤春菜

このスタディツアーに参加し、約1週間という短い時間に山ほどの新しい知識を得たことが初めてだった。とても新鮮であり貴重な日々を過ごすことができた。実際に自分で体験したり知識を得ることで、そこから生まれる疑問があり「どうすることが最善なのか」と頭をもたげた。沢山の経験をした中での、特に印象に残っているものについてエピソードを含めて考えてく。事前学習の段階で、私はエコツーリズムに



について興味があった。事前に日本のエコツーリズムについて調べてみると、具体的に成功した事例を探ることが難しかったが観光客は増えて経済効果が生まれているようだった。しかし観光客が増えることで生み出す植物や動物への悪影響が多いように感じられた。そこでカンガルー島ではどのような実践を行い、果たしてエコツーリズムのサイクルが綺麗に回っているのかとても気になったのだ。実際にカンガルー島で行われている現状がわかるだけでなく、エコツーリズムのあり方も考えることができた。

9月3日。1日を通してカンガルー島で行われているエコツーリズムの現状がよく分かる。とボブに言われとても楽しみにしていた。まず Seal Bay へ向かった。ここがなぜエコツーリズムに関係しているのか。それはアザラシのことを一番に考え、観光客を管理することを実践している点である。観光客はガイドさんと一緒ではないと決められた場所を歩くことができない。いかにアザラシにストレスを与えないかということを中心にしている。次に Rapter Domein に訪れた。私たち人間側からすると動物たちと触れ合うことは興味が湧く。いわゆるふれあい体験は動物園や水族館では人気だ。しかし動物たちにとってそれはストレスではないのだろうか。最後に Wild Life Park に向かった。二つを訪れた後で動物園と言われるような動物との距離が一番近い所を訪れると、これはいいのだろうか。動物に対して申し訳ない気持ちになった。ここでは柵の中に動物が生息していて、Seal Bay とは異なり動物が管理されているのが印象的だった。

この三ヶ所を訪れて感じこは、観光客が訪れる目的である動物や自然の植物と観光客という人間が共に共生していくためにはどのような場所を提供するのがいいのか、ということだ。全てに害が少なく、より良い社会が育まれるのは Seal Bay のように自然や動物を大切にするという動きだと思う。しかし、子供が好きなのは動物と触れ合ったり、体験

できることというのが現実なのだ。これからの未来のために何を1番にすることが1番大切なのか。それはやはり全ての生き物が平等に共生することであると考える。カンガルー島で行われている、観光客を管理するというのを日本や世界でも行われるような促しが行われるべきだ。

また人間と動物に焦点を置くだけでなく、人間と自然の関係も考えた。例として Remarkable Rock では、岩にたどり着くために歩くところは、生きている植物を汚さないようにフットパスで作られている。このように動物や植物を自分たち人間と同類と捉えることで、より良いサステナビリティにつながるとことを学んだ。

はじめはカンガルー島では様々な取り組みが行われているけどそれは住んでいる人口や街の雰囲気、人々の生活するサイクルが日本とは違いすぎるからできていることであり、日本の規模を考えると不可能に近いだろうと思っていた。しかしそんなことを思っても嘆いても、何も変わらず気候変動だけは着々と進んできてしまう。だから自分ができることを行動してみようと思う。サステナビリティは「小さな働きが大きな成功を生む」という言葉が当てはまると思った。一人一人が自分や家族、地域のためにやっていることが、結果として気候変動を抑える一歩になる。しかし世の中には妥協して進まなくてはならないことがある。行っていることすべてがサステナビリティにつながることは難しいと思うけれど、実践するというのを着実にやっているカンガルー島の人々に私は感動した。

最後に、このスタディツアーに反対することなく受け入れてくれて応援してくれている両親、沢山の経験や素晴らしい経験をたくさん提供して下さった永田先生やボブとジェニー、木村先生をはじめとするこのスタディツアーに関わって下さったすべての方々に感謝する。そしてカンガルー島にこの6人で行くことができよかった。

Changed my life

教育学科教育学専攻 二年 小島友梨香

私は今回が人生初の海外だった。行くことが決まってから不安というよりもとてもワクワクしていた。実際に行ってみるとこの10日間は本当にあっという間だった。普通の海外旅行では有り得ない素敵な体験ばかりで贅沢だったと思う。毎日綿密なスケジュールで寝不足気味になることもあったがとても充実していた。



私が一番記憶に残っているのはカンガルー島の人々の温かさである。日本はおもてなしの国と言われているが、カンガルー島以上のものはないと思う。最初から最後まで色んな人に優しく、そしてフレンドリーに接してもらえた。例えば、カフェでは偶然訪れていた地元の方とお話した。まだ、来たばかりで慣れていなかったため、単語単語での拙い英語しか出てこなかったが、それでも一生懸命話を聞いてくれた。そして笑顔が絶えずだったので少しずつオーストラリアの環境に慣れたきっかけになった。

これ以外にもボブやジェニーを始め沢山のカンガルー島の人達の温かさはずっと忘れる事はないだろう。

私は小さい頃から教育に関心があり、外国の教育に興味があった。実際に KICE を訪問すると、小学校低学年の子でも動物の特徴などを説明出来たり、また中学年高学年ではプラスチックゴミ問題についての動画を作成したり、5.6歳の子が市議会に提案をしたりと、日本とは全然違うことに驚いた。日本は確かに教育が発達しているかもしれない。でも KICE を訪問して日本もまだまだなのかもしれないと感じた。それから、KICE で考えさせられた教育についてもっと学びを深めたいと思った。そのためにはまず日本の教育の現状を知るために帰国後、ボランティアを始めた。それぐらい私にとって影響を受けた機会だった。素晴らしいカンガルー島の人々の温かさや、発見や驚きのあったカンガルー島。初めての海外だった私はとても刺激的だった。

沢山の思い出が詰まったカンガルー島。たった約一週間半しか滞在していないのにボブとジェニーと別れの挨拶した後、飛行機が離陸する直前に涙が止まらなくなった。それぐらい私にとって充実していた日々だった。

高校生の時、とある先生に「海外に行ったら人生変わるよ」と聞いた。私はその時信じていなかった。どこに行っても、大して変わらないと思っていた。でも今は、カンガルー島の経験は私の人生に関わると思う。私はこのツアーに参加して今までの価値観や考え方が変わった。そして自分自身も大きく成長したと感じた。初めての海外がカンガルー島で良かった。本当に心底思う今回のスタディーツアーだった。

DON'T BE SELFISH!!

教育学科教育学専攻 2年 齋藤雅代

「私たちが生きるということはどういうことか。」

これは今回のスタディーツアーで得た、私の中でできた最大の問いである。ツアーの初日に永田先生から、自分の中で問いをたくさん作るようにとお話があった。どんなに考えても答えが出ないような問いを作り、今までにないくらい深く考えてみようと思気込んだことをよく覚えている。この問いを持ったきっかけは、



プログラム2日目のエコハウスで、自然に囲まれた贅沢な一人の時間を過ごした時なのかもしれない。誰にも何にも邪魔をされずに全身で自然を感じることができた。目の前に広がる海と草原を眺めながら、波の音や虫の声に耳を傾ける。全身をなぞる風にのった自然の香りを力強く、そして鮮明に感じる。東京で生活する私にとって、すべてが新鮮に感じられた。もちろん初めて海や虫を見た訳ではない。東京で生活をしていたって海は見られるし、虫だってたくさんいる。しかし何か圧倒的に違って感じられたのである。「なぜだろうか。」最初の問いはここからだった。まず私が考えたことは、カンガルー島に来た高揚感により、東京よりも空が広く、海が綺麗で、自然に囲まれているという事実に関心しているからである。という答えだった。あまり深く物事を考えない私は、自分が出した答えに満足していた。同時にきっと東京よりも田舎だから、自然もたくさん感じられるのだろう。と傲慢な考えさえ持っていたと思う。

東京とカンガルー島で感じる自然の違いについての最初の問いに、自分自身が納得できる答えがでたのは日本に帰国してからのことである。帰国して日が経ってもカンガルー島の大自然は私の脳裏に色濃く残り、空の青や木々の香りが恋しくなっていた。少しでも自然に触れたいと思い、散歩に出かけたことがあった。しかし木々が切り倒されていたのである。周りを見渡しても、残された木の根元は全てコンクリートで埋められていて窮屈そうだ。そこでやっと最初の問いに対する本当の答えが分かったのだ。エコハウスでは安易な考えでまとめてしまった、カンガルー島と東京にある自然の圧倒的な差は「生き物として扱われているか、否か」である。例えばカンガルー島で感じた自然は、現地の人々に大切にされ、こちらから問いかけると答えてくれるような感覚を与えてくれた。同じ地球に住む仲間とし

て、木や虫だけでなく風や海でさえも、それぞれが心を持ち、語りかけてくれているようであった。しかし反対に東京では、都市開発の餌食になる、街のインテリアでしかないのだ。私はなぜこんなにも簡単に自然の命を殺すことができるのだろうと思った。カンガルー島に住む方たちのように、植物や動物の命などの自身を取り巻く自然に対して、軽んじることなく真摯に接していれば、自然は人間に返してくれるものだと思う。その証拠にカンガルー島の自然はあんなにも素晴らしい景色を見せてくれたのだ。

地球を取り巻く自然と私たち人間との直接的な関係を見ても、人間は少なからず植物がつくる酸素を吸って生きているし、動物や植物を食べて生きている。人間が生きるためには動物や植物、自然が絶対に必要なはずなのにそれを理解している人がこの国にどのくらいいるのだろうか。生き続けるためには自分たち以外の生き物を大切にすべきなのではないか。特に最近ではマイクロプラスチックなどの海洋汚染問題も、自分たちのことしか考えなかった人間が起こした公害であるといえるだろう。結局は自分たちに返ってくるのである。この先ずっと、私たち人間が利己的な開発を進め、人間以外の命を大切にしなかったら何が起こるのだろうか。その今現在進められる過度な開発は、これから生まれてくるであろう新しい世代が生きる未来よりも、大切なものになり得るのだろうか。未来に生きる新しい世代のために私たちは何ができるのだろうか。どのように生きるべきなのか。「**私たちが生きるということはどういうことか。**」ここでやっと最大の問いに行きつくのである。

では生き物たちと良い形で共存し、サステナブルな生活を送るカンガルー島の方々は、どんな風に暮らしているのか。私が現地で最も感じたのは「相手を大切にする精神」だ。今回のスタディーツアーでお世話になったみなさんから感じられた精神である。この場合の相手は人だけでなくても良い。カンガルー島に生息する動物たちや庭で育つ草花も相手の対象になる。まず動物との関係について考えると、現地の方々はある限り動物の生態や生活に寄り添う。浜辺にゴロゴロと寝そべるアザラシには保護施設をつくり、人間の食生活にはなくてはならない、植物の受粉を行うミツバチのために農薬の使用制限をする。植物に対しても寄り添う心を忘れない。エコハウスのお庭では、木や草を食べる動物をうまく避けながら立派な木に成長させる植樹を行っている。また愛情のこもった家庭菜園を持つ家が多く、自分たちを生かしてくれる植物に対するリスペクトの気持ちが表れている。人間に対しても例外ではない。人は支えあって生きるから、迷惑や世話を歓迎するといった精神を感じることができた。ある方は、人は人を認め、認められることでよりよく生きていけるから、自分でない他人を大切にするのだ。と仰っていた。ここで相手と述べたものたちは、すべて生き物である。つまり「命あるものを大切にする」ことがカンガルー島では自然に為されて

いるのである。冒頭に述べた最大の問い「生きることはどういうことか」に対する私なりの答えは、「命あるものを大切にすること」とまとめられる。これは利己的な考えのもとでは、決して成り立たない。それぞれがみんなを想い、周りを取り巻く自然を想うことで初めて成り立つのである。結果としてそれが自分たちに返ってくるはずである。だから、利己的になってはいけないのだ。

最後に、今回のスタディーツアーを終えて新たにやってみたいと思うことが出来たことについて述べようと思う。私は今回のプログラムを通して、カンガルー島で得たことを日本で活かすことができるのではないかと強く思っている。特に今回のプログラムのキーワードでもあった「サステナビリティ」や「気候変動」に関することは、日本では未開拓の部分が多いと感じた。これは幼いころからの教育に大きな原因があるのではないかと思う。オーストラリアの教育の基礎には「サステナビリティ」がある。小学生でもサステナビリティについて自身の考えを語るができるのだ。これは日本人にとっても、地球市民の一員として大切なことだと思う。一人ひとりが世界について考えることが必要な時代だからだ。そこで同行して頂いた木村先生と永田先生のお話から、日本での教材づくりに興味を持った。カンガルー島で学んだことを日本で形にすることで、自らの学びを深めることにも繋がり、未来を担う世代やその世代の教育者へ向けてのメッセージになると思うからだ。スタディーツアーに参加したメンバーと取り組めたらとても素敵だと思う。また、このプログラムは私にたくさんのことを考えさせるものであったが、同時にもっと研究したいと思わせてくれるものでもあった。教育学科に所属する者として、プログラムで訪問した KICE ではたくさんの発見があった。サステナビリティに関する教育はもちろん、日本とは全く違う授業方法、校内施設、教室デザインなどが挙げられる。そして木村先生との雑談の中で伺ったオーストラリアの開発教育についてのお話にも強い興味を持ち、これからの学びの中心になるだろうと感じている。これだけ学びを深められたのも、もっと学びたいと思えていることも今回のスタディーツアーで得た貴重な財産の一つだと思う。

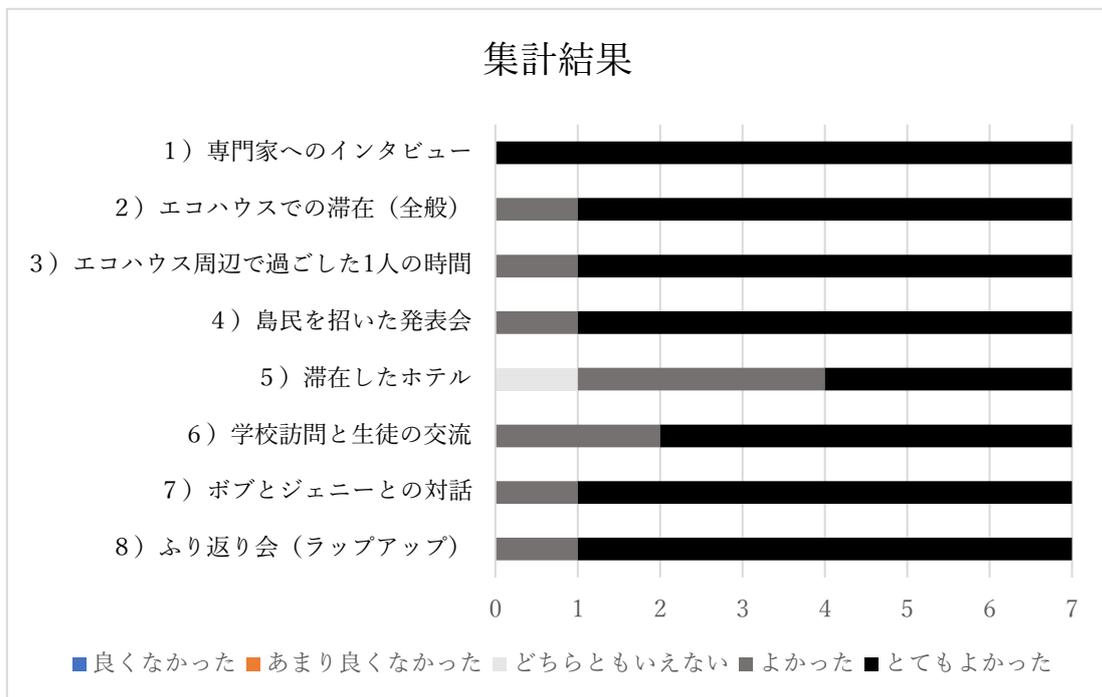
このような機会を与えてくださった永田先生、学びを実りあるものにするためにご尽力頂いた、ティーズデイルご夫妻をはじめとするカンガルー島の方々、同行して学びが広がるようなアドバイスをしてくださった木村先生、4月からチームとして一緒に学びあってきた6人の仲間、ツアーのためにたくさんの協力してくれた両親に大きな大きな感謝を伝えたい。

10.帰国後アンケート

1.スタディツアーで印象深かったことを3つ選んでください。

※章末（グラフ1）参照

2.体験に対する評価をしてください。



3.スタディツアーで最も印象深かった体験はなんですか？1つだけ、その理由と共に記して下さい。（自由記述）

・KICE への訪問。気候変動や持続可能性についての課題を各々が持っている KICE の現状と日本との間に意識や価値観などの差を感じたため。

・ボブの森にいた年老いたカンガルーと出会ったこと。尻尾だけで頑張って移動していったあの後ろ姿が、今も忘れられない。ただ黙って見守ることしかできなかったが、頑張って長生きして欲しいというよりも、穏やかに自分の思うままに生活して欲しいという思いの方が強く感じた。今はどうしているのか、とても気になる。

・ Seal bay への訪問。あのよう観光客が管理されている所に訪れたことがなくて印象に残った。

・最後の発表会。みんなでカントリーロードを歌った時や発表をしたときの島民の温かさが忘れることができないから。

・小学校の訪問。小さい頃から動物やサステナビリティを理解していて凄いと思った。

・ボブやジェニー、救急センターのパトリシアやファイン・アートギャラリーのフレッドをはじめとする多くの素敵な大人に出会えたことが最も印象に残っている。それぞれの人生観やカンガルー島への愛、コミュニティのつながりの強さなどを体感することができた。印象的だった訪問先や活動は一つに絞れないが総合的に考えて、カンガルー島の雄大な自然の中で、熱意のある方々から専門的な話を伺えた経験は得難いものだと思うからだ。

・最終プレゼンテーション。自分で感じたことを自分の力でプレゼンしきれたことは、大きな自信になった。

4.スタディツアーの間に普段よりも深く考えたことがあれば、教えてください。（自由記述）

・モノやコトに対する基準や概念（自然・金銭・動物など）、島民の価値観やそれを育む教育方法、などについて

・自然の中で人間はどういう存在か、どういう存在であるべきなのか（自然と人、人間社会の関係について）

・気候変動に対してコミュニティが持つ力とは何か

・KIのサステナブルな取り組みを東京でどう生かせるか

・サーバントリーダーとは何か

・日本とオーストラリアの比較について

・wild life について

- ・ 私たちにできることは何か
- ・ 将来自分がどのような仕事に就きたいか
- ・ 学部の専攻と教育をどう結び付けられるか
- ・ ビジネスと持続可能性について
- ・ 環境問題について
- ・ 日本でできることは何か
- ・ 小さいことから少しずつやるために、何ができるか

5. スタディツアーに参加して自分は変わったと思いますか？

①はい 6名 ②いいえ 0名 ③どちらでもない 1名

→ 「はい」と答えた方にお聞きします。どのように変わりましたか？

- ・ 物事に対して常に疑問を感じたり、自身の価値観で物事を測るのではなく多様な角度のから対象に対して考えたりするようになった。
- ・ 飛んでいる小さな虫や道路で寝ている猫、文字のない物(看板、絵、模様など)など、日本を発つ前は何とも思わなかったものに関心を持つようになった。何しているのか、何を伝えようとしているのか、心を向けて少し考えるようになった。また、物を購入する前に本当に必要なものかなど考えてから買うようになった。
- ・ まずは行動に移そうと思えるようになった。
- ・ 普段、消極的な自分を変えたくて、質問したり、英語に対して向上心を持って取り組んだりすることができたこと。また、周りを見て、行動しよう意識するようになったことが変わった。
- ・ 日本に着いてからもサステナビリティに考えるようになった。心身共に前向きになった気がする。
- ・ まず、質問を考えながら専門家やカンガルー島出会った方のお話を伺えるようになった。また、一緒にスタディツアーに参加した学生や初対面の人とも自分から話せるように

なったと思う。他には、環境問題にかかわらずニュースや身の回りの出来事に関心・疑問を持てるようになった。

6.スタディツアーに参加して最も大変だった点について1つだけ教えてください。

- ・ 勇気を出すこと
- ・ 英語力
- ・ 最終日のプレゼンテーション
- ・ 入ってくる知識の量が多すぎたこと

7.スタディツアーの改善すべき点があれば、教えてください。

- ・ カンガルー島での自由時間が少なかった点
- ・ 1日に詰め込みすぎていた点
- ・ トピックを網羅できるような事前学習を満遍なくするべきだった点

8.今回のスタディツアーを通して自分の英語力は向上したと思いますか？

- ①はい ②いいえ ③どちらとも言えない

→上の回答の理由について簡単に説明してください。

- ①はい 4名

- ・ 話すことはまだ足りない部分が多いが聞き取りは成長したのではないかと思う。
- ・ 日本に帰国してから気づいたが英語文を読んだり聞いたりするのが前より楽になった。
- ・ カンガルー島滞在初日の方は英語がほとんど聞き取れずとても焦ったが、最終日にはフレッドや市長さんと話すことができたからだ。また、大勢の前でプレゼンをしたことも、内容は至らない点が多いですが自信になった。英語で情報を集めることへの抵抗が少し薄れたと感じる。

・しっかり話さない伝わらない(発音)が、伝えたいと思えば伝わる(文脈)し、わかってくれようとするのが実感できたから。

②いいえ 0名

③どちらとも言えない 3名

・英語力に対する殻を破れたというような変化を感じることができず、自身で測ることが難しいため。

・向上と言えるのか分からないが、スタディツアーを通して、人前で話すことに対して以前よりも自信を持って話すことができるようにはなったとは思う。しかし、Listening, Speaking のスキルはまだまだだと痛感。

・英語力は、あまり変えることができなかったと思うが、伝えよう話しかけよう発言しなきゃという積極性は少しついたように思った。

9.今後のスタディツアーについて「こうだったらよい」と思うアイデアや工夫があれば記して下さい。

- ・何かを体験させてもらうというのと良いと思う。
- ・訪問一つひとつに時間がもう少しあると良いと思う。
- ・頭の中を整理する時間がラップアップ以外にもあると良いと思う。
- ・現地を生かした様々な活動ができるととても良いと思う。
- ・もっとインタビューの時間があると良いと思う。

10.今回のスタディツアーについて思うところ何でも自由に記して下さい。

・英語力の向上を目的にしていた部分もあったが、それ以上に英語力以外の様々な点が成長できたと感じられる旅で、充実した時間を過ごすことができた。

・カンガルー島のコミュニティの強さに驚きを隠せなかった。島の人口が少ないから必然的に顔見知りになって、人と人との間に深い関係が構築されることで強いコミュニティが

形成されるのかもしれないが、それだけでは語れない何かがカンガルー島にはあると感じた。その何かは教育によってなのか、一つ一つのサステイナブルな取り組みが生み出すものなのか、皮肉にも気候変動の脅威を知ってしまったことで生み出されたものなのかなど、何かは分からないが、このような強いコミュニティが形成されるためのキーとなるものが、何かあるように感じた。それを知るためにも、いつか日本の離島に行ってコミュニティについて調査して、カンガルー島にはあって他の島にはないものは何なのか、調べてみたいと思った。

- ・ 沢山の出会いと経験ができて感謝です。ありがとうございました。

- ・ ボブとジェニーを始め、とても温かい人々との出会い、気候変動への取り組みにはコミュニティがとても大切だということが分かった。Bob が言っていた人の豊かさを持っていることで、環境への取り組みを周りの大人だけではなく、子どもや観光客に伝えることで環境への好循環になっていると思いました。人との出会いは大切にしようと思改めて考えさせられた。また、小学校の訪問で自分の将来について考えた。また、英語の勉強も本格的にやらないと自分の理想には、近づけないと思ったので頑張ろうと思うことができた。人生で最も濃い 10 日間だったと思う。

- ・ 自分自身で成長したなと思うスタディーツアーでした。

- ・ 違う大学からの参加で緊張しが、皆さんが温かく受け入れてくださって充実させることができ感謝している。木村先生が引率で参加してくださったことも、ご専門についての詳しいお話を伺えたためとてもよかった。また、これまで気候変動や地域のつながりについて深く知らなかったが、先生やボブがいろいろな視点から農場や Ambulance 等の訪問先を選んでくださったため視野が広がった。十日間はあっという間でとても貴重な経験となったため、今度は日本で何ができるかを模索していきたいと思う。

- ・ 海外旅行では経験できないことや普段の授業では感じられないことを、経験できて実感できて本当に良かった。また、なにより今回のツアーでの出会いは何にも代えられるものではないと思うので、大切にしたいと思った。

11. オーストラリアのイメージを一言で表して下さい。

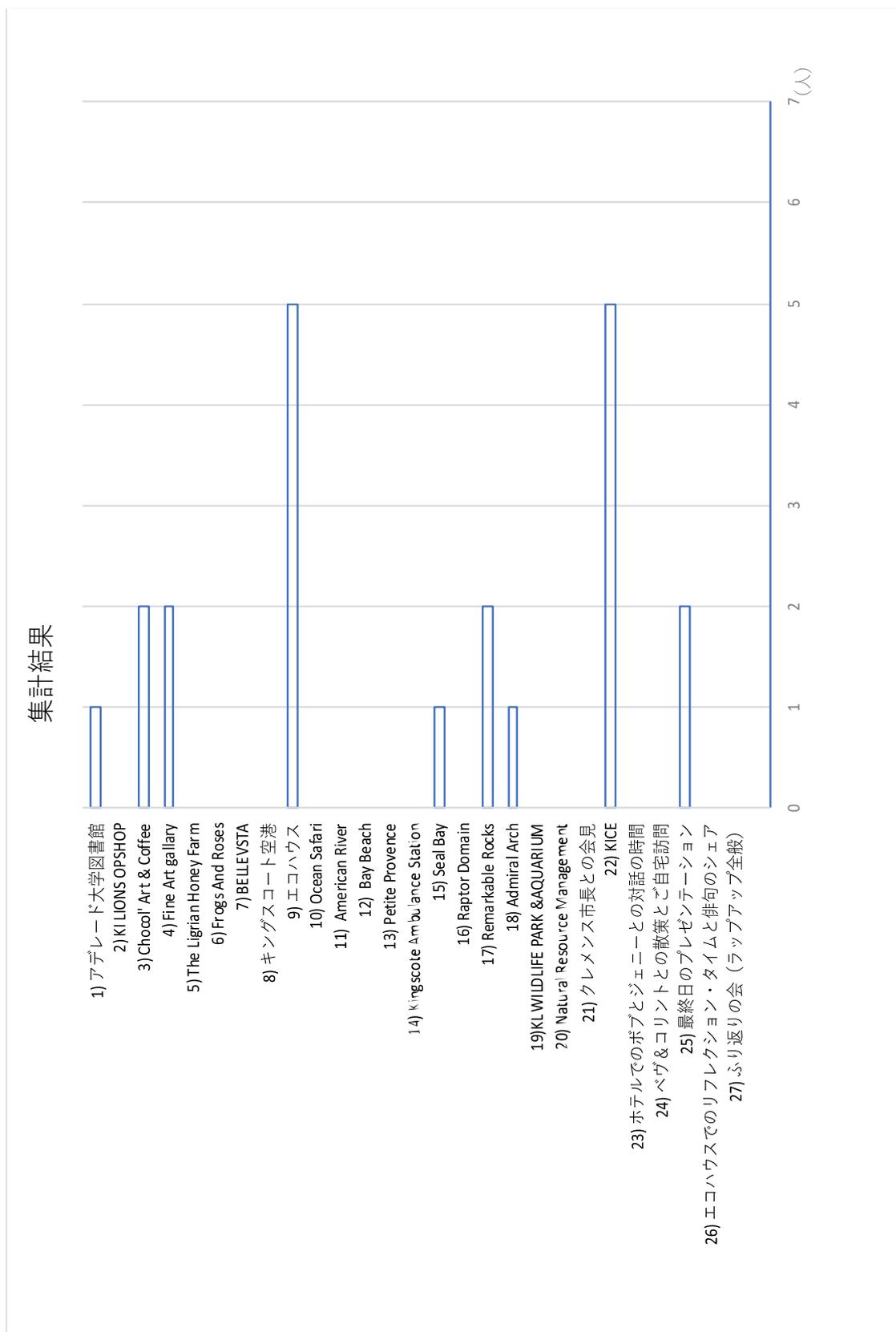
- ・ 未来

- ・目には見えない大切なものを大事にしている国
- ・人々があたたかい
- ・動物を尊重する自然豊かな国
- ・十人十色
- ・器の大きい国
- ・自然!

12.あなたにとってサステナビリティ（持続可能性）とは何ですか？ 一文で表して下さい。

- ・地球を友達と思うこと
- ・次世代のために、頭ではなく心を使って、皆で(子どもも若者もお年寄りも)より良い社会を創造し続けること
- ・自信をもつこと
- ・人と助け合いながら、将来を見据えて環境のために行動を起こすこと。
- ・未来を考える機会
- ・身の回りの問題を見て見ぬふりをしないで、私たちが協力して対応しないと得られないもの
- ・無理をしないで未来を考えること

(グラフ1)



11.スタディツアー名言集

スタディツアー中に出会った心に残る言葉を紹介します。

“Talking is important for art” by : Fred Peters (Fine Art Gallery)

芸術を通してサステナビリティを実現できますか？という質問への答えとしてアートギャラリーのピーター氏が語った言葉です。作品をただ鑑賞するだけでなく誰かと感想を分かち合うことで多様な意見を知り、考え方の違いによる争いを避け、持続可能性に貢献できると仰っていました。

“Art is the truth teller” by : Fred Peters (Fine Art Gallery)

芸術の重要性について、ピーター氏がジャクソン・ポロックの「Coffee Cup」という作品を例に話してくれました。第二次世界大戦中、芸術は時代の真実を伝えるためにあるという考えのもと描かれた作品で、ピーター氏のギャラリーにあった自然の美しさを訴える作品と同様に芸術は truth teller であることを実感しました。

“No Bees, No products of Food” by : Clifford Family(The Ligrian Honey Farm)

養蜂場の経営者でクリフォード氏語った言葉です。食物連鎖や生態系で重要な位置を占めるミツバチがいなければ私たちの生活は成り立たないと言われており、生物と共存することが大切であると考えさせられました。

“No money, but good feeling!” by: Tim Leeuwenburg(Ambulance)

カンガルー島の緊急診療所でボランティアとして働くルーヴェンバーグ氏に伺った、「激務のモチベーションは何か？」との問いへの答えです。無償のため利益にはなりません、コミュニティに貢献したいという彼の強い思いややりがい伝わってきました。

“Happiness is Power, Power is Happiness” by: Trish Leeuwenburg (Ambulance)

上記の質問に対して、同じく緊急診療所で働くルーヴェンバーグさんはこう答えてくれました。幸せが力になり、その力がまた幸せを生むというようにとても良いサイクルを感じて働いている彼女の笑顔に、私たちも大きなパワーをもらいました。

“Capitalism is gone!” by : Phillipa Holden(Natural Resource Center)

自然資源センター職員ホールデン氏の印象的な一言です。資本主義は去った、そして私たちはどのように生きていくのか？日々環境問題と向き合う彼女からの示唆に富む言葉です。

“Do you want to eat poisons?” by: Kayla & Alanah (KICE)

KICE の小学生が作成したビデオに登場するメッセージです。私たちの日常生活によってマイクロプラスチックが漂流する海を前に、体に毒が入り込む世界でもよいのか、いま強く問いかけてられています。

“What is important for teacher is to be a co-learner” by: Bob & Jenny

KICE と日本の学校を比較した際に、KICE の特徴として生徒と先生が共に学びあう存在である、ということが挙げられました。また、先生が生徒を対等に捉え尊重する姿勢も印象的でした。

Q. What is the sustainability?

A. Leaving the world better place than I found it. not leaving any footprint behind. by: Bob Teasdale

A. Living in tune with your environment and understanding your community with it. by: Jenny Teasdale

カンガルー島での研修も終盤のころ、ボブとジェニーにサスティナビリティとは何かを改めて伺いました。ボブの答えは「見つけた時よりも世界を良い状態にすること、1つもフットプリント(地球への負荷)を残さないこと」だと仰っていました。ジェニーは「身の回りの環境と調和して暮らし、それを通して自分の住む地域について理解すること」と答えてくれました。

“development= de + envelop + ment” by: Yutaka KIMURA

引率して下さった木村先生の言葉です。Development とは一般的に開発や発展と訳されますが、元々は包んでいるもの (envelop) を外す (de) という意味があります。つまり、「隠されているものを発揮させること」を表す言葉なのです。

また先生の研究分野の一つである開発教育においては、外からの圧力で内にあるものを発揮させるのではなく、「人を育てる教育」という観点が大切だと仰っていました。

“適応するものが生き残る” by: Fred Peters

アートギャラリーのフレッドの言葉です。カンガルー島で 11 年以上もギャラリーを持続することができた理由として答えてくれました。生態系だけでなくビジネスにおいて

も適応できた者が生き残ります。確かな信念を持ちつつ、しなやかに生存する力が大切であると感じました。

“I'm thinking of my grandson's life…” by: Bob Teasdale

ボブが仰っていた言葉です。気候変動の影響である海面上昇によって、エコハウス近くの海面も上昇し現在の風景や自然が見られなくなる恐れがあります。ボブは自分たちの世代だけでなく孫たちの生活を考えていると仰っていて、サステナビリティという言葉の意味を改めて考えさせられました。「将来世代の暮らしを守る」と言うと大げさに感じてしまう人もいると思いますが「自分たちの子や孫世代の生活を守る」と置き換えてみると私たちが具体的な行動を起こす必要を実感できるのではないのでしょうか。

“All connected” by: Saori SHIBA

ラップアップでエコハウスを見学した感想として紫葉さんが選んだ言葉です。水や電気を循環させサステナビリティを実現できているエコハウスは温かく、自然や人を大切に作る心(caring)のある場所でした。また、その後に木村先生が仰っていた“holistic”という言葉も全てが繋がっていることを表しており循環という言葉が印象に残る見学となりました。

“We can't do everything, but we do what we can!” by: Bev Maxwell

一般的な家庭でサステナブルの暮らしを実践するベブさんが仰っていました。また、自分たちの生き方を Modest Sustainability(穏当な持続可能性)であると教えてくれました。私たちが今あるすべての課題を包括的に解決することはできません。しかし、私たちにできることを実践していくことが大切なのだ、という心強いメッセージでした。

カンガルー島で出会った方々や私たちの学びから生まれた言葉を忘れずに、

今後も具体的な行動を起こしていきたいと考えます。

12.Kangaroo Island Photo galley

写真でオーストラリアでの10日間を振り返ってみましょう！



Narita airport



The University of Adelaide



Kangaroo Island airport



Clifford's Honey Farm



Chocol'Art & Coffee



The Islander



Bob & Jenny's Eco house



Sustainable Lunch



Jenny's Lecture



Canola Farmers



Seal Bay



Tour on Eco tourism



Smile:)



Pennington Bay



Natural Resources



Lecture by The Mayor of Peter

Remarkable Rocks



Bob & Jenny's Lecture

Clements



Bev & Colin's House



Bev & Colin Sustainable Life



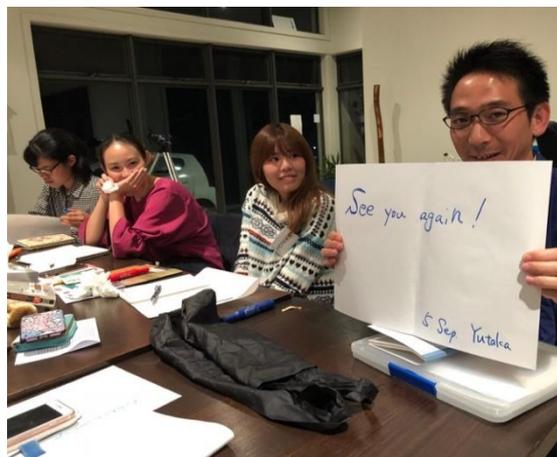
Presentation on Final Day



Last Wrap up



Sun set on Kangaroo Island



See you again!!!

むすびにかえて

気候変動の脅威を肌身に感じた今年の夏、私達はサステナビリティをテーマとした気候変動の適応と緩和の実践を学ぶために、カンガルー島スタディーツアーに参加しました。気候変動に対して私達ができることは何かと、食、エネルギー、エコツーリズム、家庭、ローカルビジネス、教育、生物多様性などそれぞれの立場から自然に向き合って考えた10日間は、私達にとってかけがえのない経験となったと同時に、参加者それぞれの世界観や価値観が変わるような、人生において大きな意味を持つ経験となりました。

現地で見えた自然体で行われているサステナブルな実践、次世代まで見据えた市長の画期的な構想、またカンガルー島の人々との出会いや、自然の美しさや素晴らしさは、私達を豊かにしてくれました。そしてそれらを全身で感動することができたのは、私達にとってそれが非日常の出来事だからというだけでなく、生きる上でこの上なく大切なことだからと、それぞれが感じたからかもしれません。そのような出会いを通して答えのない問いを深く考えることは、私達の学びの世界が広がるきっかけにもなりました。

「Sustainability(持続可能性)」ということが重視されるようになった今、私達はこのスタディーツアーでの経験を自身の学びだけにとどめずに、周りに伝え、そして行動に移していく必要があります。その第一歩として、私達はカンガルー島で見たサステナブルな取り組みを大学でも行いたいと思い、大学への提案をすることにしました。未来を担う学生の人生や価値観を築いていく教育の場を自然環境を考えた空間にしていくことは、学びを通して持続可能性を育んでいく上でとても大切なことではないかと思います。また来年の4月からは、聖心グローバル共生プラザにあるBE*hiveで、気候変動をテーマとした展示が行われます。その展示にもより大学をサステナブルにするために、積極的に関わっていきたいと思います。カンガルー島から帰国して早くも3ヶ月が経とうとしていますが、私達はこれからもカンガルー島での経験を活かして行動していきます。

このスタディーツアーを通して、多くの貴重な出会いや学びの機会を与えて下さったことを心より感謝申し上げます。スタディーツアーの企画や現地でのお世話を下さったボブ&ジェニー・ティーズデイルご夫妻、事前学習・事後学習でお世話になりました、認定NPO法人環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲成さん、横浜市資源リサイクル事業協同組合企画室室長の戸川孝則さん、一般社団法人Think the Earth理事の上田壮一さん、本当にありがとうございました。そして最後に、このスタディーツアーを全面的にサポートして下さいました永田佳之先生、滋賀県立大学の木村裕先生、大学関係者の皆様、家族の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

2018年度聖心女子大学
オーストラリア・カンガルー島スタディーツアー 参加者一同

2018 年教育学科スタディーツアー

「オーストラリア・カンガルー島で学ぶ気候変動へのアクション」報告書

2018 年 12 月発行 聖心女子大学文学部教育学科

「発展途上国における教育問題」

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4 - 3 - 1 永田佳之研究室

編集：2018 年度カンガルー島スタディーツアー参加者一同

